

ふ間もなく又不愉快な顔をし出す。どうにも手の付けやうがない。

私は反省させられた。自分の持つ不安、不足、不信の翳が麗峰を暗くしてゐるのだと氣附いて、私自身の心持を立て直した。明るく、朗かに通つた。

しかし麗峰は相變らず曇つた顔をしてゐる。五月の空のやうに何時霽れるやら判らない。と麗峰は終に傳道を止めさしてくれ、そして元々通り何處かに就職したいと言ひ出した。

勿論私は許さなかつた。彼が逃げ出すならばいざ知らず、私は決して許すまいと思つた。

私は最後のものに打衝つかつたやうな氣がした。百人の信者を失ふとも麗峰一人を育てたいとの私の發願も暗礁に乘上げてしまつたのである。

人事を盡して天命を待つ。残れるものは私の懺悔あるのみ。私はひたすら毎日懺悔した。麗峰の心を甦らして下さるなら、傳道にどんな苦勞も障害も厭ひませ

んと祈り續けた。沈み切つた彼を家に残して、私はお救けに出た。

或る日の黄昏、私はお救けから歸つて來たが彼は家に居なかつた。夕勤めも終へ、夕飯時になつても歸つて來なかつた。私は箸も取らずに待つてゐたが十時、十一時になつても歸つて來ない。歸つて來るまで飯を食ふまいと思つて待つてゐたが十二時が鳴り、一時が鳴つても歸つて來ない。

私は何時しか机に凭れて寝てしまつてゐた。何だか戸の音を聞いたやうでハツと氣が附くと、神殿に入る彼の靴音が聞える。私は居間から飛び出して行つた。私が神殿に入るや否や、

『わたしは死にます』

と麗峰の聲が聞えた。何か呑んだやうである。彼は崩れるやうに椅子から土間に倒れた。机の上には茶碗が倒れて水が流れてゐる。藥の包紙が散らばつてゐる。

私はギョツとした。飛ぶやうに彼の側へ馳け寄つて、口を嗅いで見た。そして机の上を點檢した。藥紙の隅に眞白の丸薬が一つ残つてゐた。私はそれを口に入れて嚙んで見た。そして呑み込んでしまつた。

私はもう我慢がならなかつた。彼の胸倉を掴んで曳づり起して、やにはに彼の横びんたを三つ四つ殴りつけた。

『麗峰、何をしてるんだ、餘りにも儂を馬鹿にするな、こんな薬で死ぬると思つてゐるのか。これで死ぬるなら死んで見るがよい。お前の老師はな、お前の馬鹿氣た狂言に乗るやうな間抜けと違ふんだ。毒薬かさうでないかぐらゐはすぐに判るんだ。神様から健康な身體を與へて貰ひながら、日々が不足々々にしか思へないやうな恩知らず奴が。喉元過ぎれば熱さを忘れる。今日まで何回も神様に救つて頂きながら、その大恩も忘れてしまふやうな奴は儂の弟子ではないんだ。僅かな不安や一寸の困難に挫けてしまふやうなものに國を救ひ、民を救ふといふ大きな

な仕事が出来ものか。孫中山を見ろ、多くの革命家を見よ、國のためには、同胞のためには、幾度死線を越えてゐるか知れないぢやないか。何回外國に亡命してるか知れないぢやないか。僅かな不自由や、少しぐらゐの不安に逃げ出すやうな人間は儂はいらん……。

今日までお前をどんなに愛してゐるか、儂の心が判つてゐるか。百人の信者を失ふとも、お前一人は救い上げようと努力してゐる氣持が判るか。儂の眼の黒い間はお前の面倒を見てやらうと考へてゐる儂の心が判るか……』

私は仁王立ちになつたまゝ彼を叱りつけた。彼は頭を下げて、一言も發しな

張  
い。私はなほも諭した。彼は黙つて聞いてゐたが何時の間にか泣いてゐた。ハラハラと涙を流しながら無言のまゝで聞いてゐたが、やがて土間に膝をついて、  
先 『老師、許して下さい。私は馬鹿でした。大きな考へ違ひをしてゐました。何も  
生 彼も忘れて、自分のことばかり考へてゐました。どうか許して下さい。何時まで

も弟子として私を可愛がつて下さい』  
とあやまつた。

彼を神前に坐らして、私も共に詫びた。涙が流れる。彼の眼からも止め度なく涙が流れるのであつた。

かうしたことがあつてから麗峰の心境には大分變化を來たした。彼はもう惱まなかつた。そして元氣に毎日お救けに出掛けて行つた。

私達夫婦は、麗峰の結婚問題を色々心配し出した。そして相手を物色し出した。切り詰めた生活の中から結婚の費用を準備し出した。色々物色したが街の娘は面白くなかつた。それで田舎から嫁を貰つた。これによつて人間味も出來、信仰も硬度を増した。

その後、天理教校にも入學させて、教師に育て上げた。  
事變が起つたり、排日が盛んになる毎に彼は漢奸だ、日本の走狗だ、密偵だと

附けねらはれたが、どの時も無事に難を逃れさして頂いて來た。

一心に傳道に献身して多くの人々を導いた。今日では皆から役員と仰がれ、私の片腕として元氣に働いてゐる。

彼は常に私にかういつてゐる。

『私は老師のためなら、この一命は何時でも差上げますよ。どんなにひ附けでも聞きますからね……』

私も限りなき合掌を彼のために捧げてゐる。

排

日

の

嵐

太陽に弓曳くものは必ず亡ぶ。

神國日本を滅さんと來寇した百萬の元軍は、博多の海の藻屑と化した。

國の大小や力の多寡がかくせしめるのではない。嚴たる天の定めが斯くあらしめるのである。

排日。それは無益な兒戯である。いくら排日しても、中國は發展するものでもなければ、隆盛に趨くものでもない。天に唾するものはそれだけの苦痛を自らの上に負うて行かねばならないことが、若き中國には長らく不明であつた。

私が北京に來た時は、丁度在來の國旗の五色旗が下ろされて、青天白日旗が城頭高く掲げられて間もない頃であつた。それまで平和の天地であつた北京に、排日の赤い南風が揚子江の沿岸から吹き寄せて來た。

間もなく首府が北京から南京に遷され、久しく口にひ慣らされた『北京』が『北平』と改稱された。同時に胡同の塍や、街巷の電柱に排日の宣傳ビラが貼り

出された。學生や子供は先生に、中國から日本を追ひ出すことが愛國だと教へられ、日本人を莫迦にすることが偉いのだと讃められた。

排日の第一の血祭に上げられたのは順天時報であつた。日支合辨の漢字新聞で、中國人間に北支の朝日、毎日といはれる位の權威を持つてゐた。

順天時報を読む者は賣國奴だ。

順天時報は吾々を害する阿片だ。

反日會はかうした聲で民衆を馳り立てた。讀者を失ふ。工人に逃げられる。そして終に涙を吞んで閉鎖のやむなきに到つたのである。

續いて日支合辨の滙業銀行が大取付にあつて倒されてしまつた。かうした空氣の北京へ私達三人の同志は、中國人救済の理想を抱いて飛込んで來たのである。排日がどんなものか何も分らなかつた吾々も、一ト月、二タ月する内にだん／＼その輪廓が分つて來た。

排日がその影を吾々の生活の上に落したの借家問題からである。

吾々は最初蘇州胡同に日本間の家を借りて、そこで六ヶ月ほど傳道してゐたが中國人傳道にはどの方向から考へても不適當である。丁度その時吾々の指導機關たる天津傳道廳から、三人は別々に家を持つやうにとの話があつた。それで意を決し、春になつてストロブがいなくなつたのを幸に、中國人の家屋を借ることにした。

吾々は毎日胡同の辻々に赤紙に書いて貼られた『吉房招租』の貸家廣告を見附けては家を見に行つた。そして、

- 一、獨身者には家を貸さぬ。
  - 二、舖保（店舖の保證）のない者には家を貸さぬ。
- といふ借家不文律が北京には嚴存してゐることが分つた。その上にもう一項

目、

- 三、日本人には家を貸さぬ。

と排日によつて附加されてゐた。

獨身、舖保、日本人、三つの條件全部に無資格の吾々は閉口した。が當つて碎けろと根氣よく頼み廻つたが、最後の一點でどこも貸してくれない。やはりこの家で我慢せなければならぬかなあと諦めてゐた。

だが考へて見るとくやしきもあるし、情けなくもある。何だか中國人に馬鹿にされてゐるやうな氣がすると共に、自分の信仰でよう神様を動かす得ないのかと自分が莫迦に見える。

何とか良い方法がないものかなあと考へにあぐんだ末、神様に御願ひをして神助を得ることゝ、中國人に化けることにした。

毎日神前でお願ひしては出掛けて行つた。行く先で中國人だと偽稱した。奥様

があるかと尋ねられてあると答へた。そして終に一軒借る約束をして手附を打つて歸つて来た。が舗保がない。顔なじみになつた八百屋、米屋、うどん屋、と頼んで見るが保証してやるといふところがない。涙を呑みながら破約するより致し方がない。

全く腐つてしまつて、家の中で寝てしまつた。

懊々として樂しめないまゝに家の中でごろ／＼してゐた或る日、同仁病院に勤めてゐる顔といふ友人が遊びに来てくれた。私達はこれ幸と、彼をつかまへて排日の非を鳴らしたり、借家難の苦衷を訴へたりした。かうして腹の虫を治めた。

ところが二、三日して、彼が一人の友達を連れて遣つて来た。彼は入口に立つたまゝ、彼の友達で家を貸す者があるから、一緒にすぐ見に行かないかとの話である。私は話が餘り良すぎるので又結局は斷られるに違ひないとは思つたが、彼について見に行つた。

場所は丁度裏通の罐兒胡同の三號。大家は何といふ支那語の先生で、獨身でもかまはぬ、舗保も不要、日本人も承知といふ天から降つて来たやうな話。私は全く神様だと思つた。

部屋は二つで、南向きの三間續きの北房が八元、その西側の一間きりの西房が二元五角、外に敷金一ヶ月分といふ値段、但し排日の盛んな時故、外部へは絶対に日本人であることを洩らしてくれらなとの懇請である。

吾々三人はその場で協議の結果、別々の家が見つかるまで一時同居しようとして、私と林君が三間の部屋に、川崎君が西の部屋を借ることにし、その翌日引越して行つた。

その日家主の手から中國側警察に提出された移轉届には

李天成 廿七歳 廣東人  
左樹藩 廿六歳 九江人

林勝良 廿五歳 山東人

と書かれてあつた。

それから以後は中國人として生活した。

さて中國人になつて自分の周圍を見廻して見ると、日本の匂ひを漂はしてゐるものが次から次へと目に附く。

第一和服が壁に掛つてゐる。下駄が部屋の入口に置いてある。夜具が坑の上に置いてある。書籍が全部日本で發行されたものである。鍋が違ふ、洗面器が違ふ、歯みがきが違ふ、行李が違ふ、全く違ふものばかりである。最も目立つものは神棚である。他の物は漸次片附けたり、中國のものを買つたりすれば何とか始末が出来るが、神様ばかりは片附ける譯に行かない。お宮、三寶、神酒徳利、土器を始め、荒蕪は見るからに日本的である。中國の神様とは祀り方が全然違ふ。こればかりは私の信念として引込めることは絶対に出来ない。よし信念と度胸で行

かう、後は神様に引受けて頂くとして……と決心した。

それから一週間ほど後、傳道を終へて歸つて來ると、家主の太太が部屋からしきりに呼ぶのである。どんな用かと思つて行つてみると、

『今日警察から貴方を戸口調査に來ましてね、本人に會はせよ、部屋を見せよといふのですよ。困りましたが貴方が皆不在なので部屋へも入れられず、院子で話をして何とか胡麻化しましたが、一時は心配しましたよ。これからも氣を付けて下さいよ』

と今日あつたことの報告である。私はよかつたと心の中で合掌した。

ところが困つたことがあつた。或る日、家へ歸つてみると一通の手紙が來てゐる。左肩に附箋が附いてゐる。學友の一人からの懐しいたよりである。よろこんで封を切らうとしたが、フツと心に思ひ當ることがあるので、私はもう一度宛名を見直した。と同時に失尻つたぞと蒼くなつた。私は手紙を握つて家主の部屋に



飛んで行つた。そして誰がこの手紙を受取つたか聞いてみると、家主の末子の小學校三年の女の子が受取つたといつた。宛名には明らかに佐藤軍紀様と書いてある。附箋は私の前に居た山田洗濯屋の附けたものである。私も山田にいふのを忘れてゐただけ不注意であつたし、家主も子供に手紙のことについては注意しておくことまでは氣が附かなかつた。今更何といつても取返しがつかない。度胸を据ゑて成り行を靜觀するより仕方がなかつた。

ところが吾々の困ることはそれだけでは終らなかつた。それは向ひの家の中國人、兩隣の家が吾々が日本人であることを知つてしまつたのである。彼等がどうして知つたかと色々調べて見ると、吾々の今度の新居が前住所と餘りにも近いのに原因してゐる。近所の商店は皆吾々三人が日本人であることを以前から知つてゐる。吾々は移轉して以後も顔なじみの關係から、買物は皆近くの店で整へた。店員達は、吾々が既に李先生、林先生、左先生になつてゐることを知

らず、相變らず前から呼び慣れた佐藤先生、川崎先生と呼ぶ。これがどうして移轉先の隣近所の者に知れずに置かう。家の向ひの何家に三人の日本人が住んでゐると近所中すぐ知つてしまつた。

もうかうなつては家主の苦心も、吾々の努力も水の泡、全く萬事休矣である。警察に知れて、追ひ立てを喰ふのはたゞ時間の問題だけである。吾々はすつかり觀念の臍を決めた。

家主も心配していろ／＼と苦慮をした。結果、一つの苦肉の策を案じ出してゐた。それは今日まで中國人で届けてあつた吾々の名を順次一名宛、一週間置きぐらゐに日本人に改めて届け直す方法である。そして届ける際に『前の中國人は上海へ行きまして、代りにこの日本人が移轉して來ました。前の中國人の友達らしいです』ぐらゐにお茶を濁して戸籍簿を書き直して貰ふことだ。御蔭でこれが成功した。先づ川崎君が日本人に還つた。そして次々と一ヶ月も経たぬ間に三人

共すつかり日本人になることが出来て吾々はホツとした。

罐兒胡同に移つてからは追々信仰してくれものが出来て、毎日一人や二人の信者がお参りに來、十八日の月次祭の日には二、三十人のものが集まつてくれた。

排日運動は風である。時ありて來り、時ありて去る。去つた後には破れた傳單が、電柱や塀に残る。

風の神は國民黨部である。決して民衆自身が捲き起す輿論ではない。中央からの指令に基き、各地の黨部がその地方の學生や反動分子を使喚して起す氣まぐれな風である。だからいつもそれは民衆の頭上を吹き過ぎる。風が吹くと民衆は肩をすぼめ首を縮めて、早く風が通り過ぎるやうにと祈つてゐる。

吾々が排日が恐ろしいと同様に中國人もそれを恐れてゐる。うか／＼してゐるとその風に當つてとんだ風邪を引いて苦しまねばならぬから、風の荒い時は表門をが／＼閉めて家の中に引込み、外へ出掛けようとしなない。

私の仕事にもこの排日の風は大變邪魔になつた。一生懸命に努力するが、少しも道がつかなくなつた。その上毎日お参りに來てゐたものまでが來なくなつてしまつた。

醫者が匙をなげた病人を二ヶ月も三ヶ月も、まるで自分の病氣でも癒すやうな氣持で救い上げて、命の親だ、救つた子だと何の隔てもない親しさになつてゐるものも、この風が暫く吹くと、私が訪問しても時々よい顔をしてくれなくなり、だん／＼と神様へのお参りが遠のいて行く。さうして日がたつうちにやがては全く來なくなつてしまふ。私はこれを賽の河原だといつた。

私は賽の河原を承知の上で傳道に勵んだ。たとへ幾度か排日の煽りを喰つて、孜孜として積み上げたものが崩されようと、一つでも中國人の救はれることなら、一つでも中國人の良くなることなら、どんな障礙に直面しようが何とかそれを押し通して行かうとした。



代時期初の同胡鑑鈴

御蔭で私は張麗峰といふ一人の片腕を與へられた。さうして彼の名儀で鈴鑑胡同といふところに十四間許りの家を一軒借りて、そこを根城として傳道することが出来るやうになつた。これは私としては大發展であり、大飛躍であつた。

二人の努力は遂に報いられて入信するものが次々に増加し、五間に二間半の神殿がお祭り毎に信者で一杯になるくらゐであつた。

私はその翌年の春、妻を娶つた。そして三人で傳道に協力した。

その夏、私は浦川といふ人をお救けしてゐた。或る洋行の大番頭であつたが、胸を病んで同仁病院に入院してゐた。私は炎天を冒して毎日運んで行つた。彼の

病氣は一進一退、中々はかゞしく行かない。彼はどこか静かなところに移つて、ゆつくり靜養したいといつてをられたが、誰一人として彼をかまつてやる人がない。私はつくづく世間の不人情さに驚きもし、あきれもしたが、問題は彼をよくなること以外に自分の仕事はないのだと考へ、私の家の一室を彼に提供して上げた。そして吾々三人は家族に代つて彼の介抱に盡した。その夏も過ぎ、天高肥馬の秋が訪れて來た。ところがその九月の十八日に滿洲事變が勃發したのである。

九月十八日といふ日は私の記念日である。私が始めて北京の地に乘込んで來た日である。神前では毎年秋の大祭が行はれる日である。この日が事變の記念日にならうとは、私はよく／＼事變と縁の深い人間である。

丁度その頃は私は、毎月十五日の天津傳道廳で執行される月次祭には、必ず北京からお参りに行つてをつた。

殊に九月は秋季大祭であるから夫婦で行くことにしてゐたが、丁度滿洲視察に来てをられる中山爲信先生が、天津にお越しになるために大祭を二十日に延期するとの通知に接したので、十九日の朝の列車で下津した。

天津東站から洋車を拾つて、天津にはまだ不馴れな妻に道々案内代りの説明をしながら日本租界までやつて來ると、

『昨夜奉天において日支開戦す、目下日軍北大營攻撃中』

の特報が、此處彼處の壁や電柱に貼り付けてある。私は強い衝撃を胸に感じた。全身を熱い血潮が足音高く馳け廻るのを覺えた。傳道廳に着いて見ると各新聞とも號外を出して、日支衝突の状況を報道してゐる。

これが私が知つた滿洲事變の第一報であつた。

二十一日には

『國交斷絶か？』

の見出しで事態の擴大して行く號外が飛んだ。

私は一切の成り行きは神様にお任せする以外に方法なしとは考へたが、中山爲信先生の北支旅行取りやめにより、傳道廳の大祭が期日未定になつたのを幸ひ、北平のことが氣になるので妻を天津に残し急ぎ歸平した。

宣戰布告、國交斷絶、邦人引揚、傳道中止、張君の處置、浦川氏のこと……。

汽車に揺られながら色々の問題を考へた。どうならうと仕方のないことであるが、たとへ事變が擴大しても國交斷絶にだけはならぬやうにと祈つた。

北平は平穩であつた。百十萬の全市民はしつかり口をつむつて事變の推移を凝視してゐるので、豫想以上に靜かであつた。まるで嵐の前の靜けさであつた。

私はホッと安心した。が、事變は枯野に放たれた火のごとく、日一日と滿洲全土に擴大して行き、全く前途の豫斷を許さない狀勢である。

天津傳道廳の大祭が廿五日に確定したので、二十四日再度下津、大祭を終へて

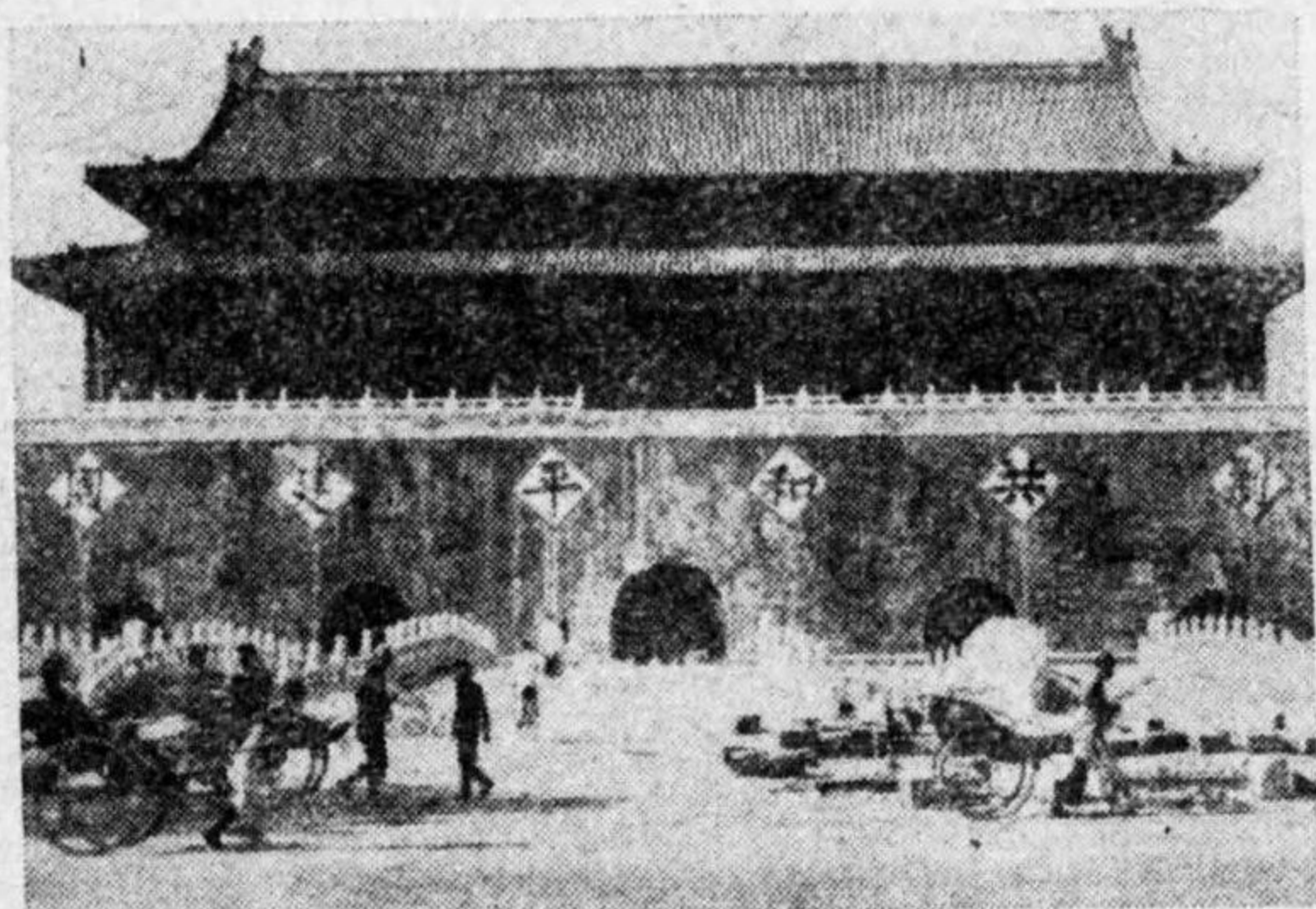
妻とともに匆々と歸平した。

事變は私の力でどうなるものでもない。私はそんなことに心を奪はれてゐるよりは、私の持場をしつかり守つて行かうと考へた。さうして毎日信徒の家を廻つた。

信徒の家へ行つても話題は滿洲事變で持ち切りである。私はこの問題に觸れたいなかつた。自分でも説明のつかない悲しいものと、淋しいものが胸の奥に湧き上つて来るので、出来る限りこの問題から遠ざかつた。

十月に入ると事變は全東三省に波及して行つた。やがては長城線を越えて北支にも波打つて来る日があるに違ひない。傳道不可能になる日が何だか一步步々々々音を忍ばせながら、近寄つて来るやうに私には感ぜられた。

私は一戸の責任者として最後の處置を考へさせられた。色々考へた末、最悪の場合には一番生命に危険性の多い張君を妻に連れさせて大連に避難さし、自分は



動かすことの悪い浦川氏を守つて、最後まで神様とともに北平に踏み止まることにした。

大連まで遣れば、父の部下教會がある。そこに厄介になりながらも、その土地の中國人に傳道することが可能だといふ考へである。

天 北京にも逐次排日の烈風が吹き荒んで来た。

安 天安門前では打倒日本の排日大會が開かれて學生の市内示威遊行が毎日のごとく繰返される。中國新聞は打倒日本帝國主義、抗戰暴

門 日急救東北等の字句を羅列して、民衆の抗戰意識に油を注いだ。

ところが十一月十一日、足元の天津から思ひも掛けぬ銃聲が起つた。便衣隊が日本租界内で發砲したのを動因として、日本租界と支那街の境界線をさかひに、日支兩軍の開戦となつたのである。北京市内に頻々と號外が飛んだ。天津は北京の玄關である。天津に戦火が起ると北京の在留邦人は全く袋の鼠である。北京から鮮・滿および内地への唯一の逃路を銃火で抑へられては、避難は絶望である。北京で籠城の覺悟を決めねばならん。

間もなく居留民會から避難準備の通知が在留日本人の各戸に配布された。いよいよ最後の時が來たのだと私は觀念した。

- (1) 避難場所は日本公使館および最寄の指定避難場所。
- (2) 携帶品は行李一個と夜具および食糧品のみ。
- (3) 避難信號は晝間は東單牌樓の日本練兵場に國旗掲揚、夜間は三發の花火によつて合圖すること。

との通告である。

練兵場から我が家までは七丁ほど離れてゐる。たとへ合圖の國旗が掲げられやうが、薨の波にさへぎられて見えるものではない。誰かに知らして貰ふより仕方がない。電話でもあればよいが、それさへない。近所の日本人の家までも遠い。色々考へた末、朝日軒と山中商會に頼んで知らして貰ふことにして、やつと安堵の胸を撫で下した。

かうなつては暫く傳道にも出られない。

毎日張君と私が偵察係で、街に出ては様子を見張つた。

市内は夜間になると戒嚴令が布かれた。そして通行人は至るところで中國憲兵や巡警に取調べられた。誰も恐ろしがつて出るものはない。繁華な町も早くから大戸を閉めて、街は全く火の消えたやうな淋しさである。

今日か明日かと避難命令に脅えながら、一日々々を萎縮した心で過ごした。

天津の戦禍はその後擴大せず終熄したが、日が立つにつれて、日支の感情は悪化の一路を辿つた。北支の空には灰色の戦雲が色濃く覆ひかぶさつて、一日として晴れる日はなくなつた。

と十一月二十六日、又々天津で第二次の日支軍の衝突事件が起つた。北京全市は又これによつて震へ上つた。さうして誰もが無言の中に、今度は北京だぞと各自の胸にいひ聞かせた。

『號外、號外、賣號外』

號外賣りの聲が胡同の冬空に響き渡る。私はその度毎にそれを買はずに居られなかつた。

號外を手にする毎に、事態は擴大の一途を進んでゐる。私はいよく張を逃がすことに決心して、彼にトランクを買ひにやつた。誰の考へも同じである。どこの家でも婦女子を先づ安全地帯に避難をさすのに血眼である。幸にも列車が北京

から山海關迄やつと通じてゐるので、皆塘沽から船でどこかに逃げようとする。

船は満員である。ビューローで切符を買ふのも容易でない。やつと十二月三日出帆の大連行きの切符が手に入った。それで妻と張君とを大連に發たすことにした。

ところが二日の日になつて、かねてから家の西の房で、病氣靜養をしてゐた浦川氏が急に悪くなつて來た。

妻はその姿を見て明日の出發を延期するといひ出した。浦川氏は自分が引受けるからかまはずに發て、機會を逸しては却つて張君の身邊が危険だといひ聞かせても、私の言を聞き入れない。すつた揉んだの上、これも何かの神意だと思ひ家内のいふ通りにすることにした。

吾々は晝夜を分たず介抱に心を砕いた。

嵐の日排  
ところがその翌日、天津から傳道廳の和久田先生の案内で、道友社の岩井孝一

郎先生が、わざく内地から動亂の支那へ吾々の安否を尋ねて来て下さった。私達は何ともいへない感激に打たれて、暫くは物もよう言へなかつた。

私の家に着かれたのは暮早い冬日の夕方であつた。お二人とも毛皮の皮のひさしの附いた満洲帽を被り、外套に寒さを防ぎながらやつて來られた。同僚の川崎君、林君、それに今川姉妹等も一緒に來て、私の居間で北京傳道の苦心談に花を咲かせてゐた。所がそこへ張君が狼狽して飛込んで來た。

彼は驚きの胸がまだ治まらないかの如く、息をはづませて表門の方を指差しながら、

『先生駄目です。表門に中國の兵隊が澤山來て、この家を取圍んでゐます。どうしませう』

との話である。一同は驚いた。私は一體何が起つたのかとヒヤツとした。

と、表門をしきりと敲く音がする。私と張君が行つてみると、顔見知りの派出所の巡警が立つてゐる。巡警は、

『お宅に満洲から來た人がをられませんか』

といふ。満洲？ 私は考へたが誰もそんな人間はをらない。

『満洲から來た人なんて、私の家にはをりませんがね』

『いや確かに二人か三人、他に四、五人支那服を着た人と一緒にこの家へ入つて行かれた筈です』

私はやつと分つた。巡警の肩越しに外を見ると、張君のいふやうに銃を持った黒い影が前の家の蔭からこちらを見てゐるやうである。

『居ります。満洲帽を被つて來た人が二人をります』

と答へると、張君が引受けて、

『二人共、天理教の先生です。一人は日本から來た先生ですし、一人は天津の先生です』



といふと、

『それではお二人の名刺を持つて、張様一寸派出所まで来て下さい』

とのことである。張君一人をやるのは不安であるが、派出所なら張君に絶対信用を掛けてゐる所だからと、お二人の名刺を貰つて張君に行かせた。

張君を表門まで送つて、彼の出て行つた後を見ると、私の目にだけでも二十人ぐらゐは數へられる兵隊——一體どうしたのか私には全く判断が附かない。

約三十分ほどして張君が歸つて來た。その報告によると、今滿洲の某機關員らしいもの二、三名が輕機關銃を携へ、支那服姿の日本人五、六名を引率して鈴鐺胡同十六號の日本人の家に入つた。彼等は先づ左府胡同の日本人の家より出て、次に蘇州胡同の日本人の家に寄り、鈴鐺胡同に來たものである。只今その家で密議を凝らしをる様子であるといふ報告が公安局にあつたので、局としては應急處置として警察隊四十名にお宅の包圍警戒を命じたのであるとのことであつた。

飛んだ誤解である、一同はこれを聞いて腹を抱へたが、北京各方面はこんなにも神経が過敏になつてゐるのかと今更のやうに見直した。輕機と間違へられたのは岩井先生の洋傘であつた。

これがあつてから以後、私の家の門には巡警が毎日一人立つことになつた。これは全く有難迷惑であつた。お参りの信者達も巡警のために段々足を遠のけた。

一時小康を見せてくれた浦川氏の容態は其の後三日して急激に悪化して、翌十二月八日終に亡くなつてしまはれた。私は餘りにも事變に心を奪はれ過ぎて、彼をよう救ひ得なかつたことを神に詫びながら、野邊の送りを済ませた。

明けて昭和七年、吾々は新しい氣持で再出發をした。

が、滿洲の曠野には至る處で新しい戰鬪が開始されて行つてゐる。全く暗雲低迷して何時霽れるともわからない状態である。

しかし、吾々は心を取直した。さうして天から與へられた本來の使命たる人心救済の一路を突進することにした。毎日三人は各自の受持の信徒の家を廻つた。ところが一月が未だ終らない二十八日、不敬事件に端を發して上海事變が勃發した。今度は南京政府のお膝下である。蔣介石は首都を洛陽に遷して、今度こそ宣戰布告をするといふ流言蜚語が飛んだ。

上海では日本租界を中心に激烈なる市街戦が展開されてゐる。陸戦隊が次々と十九路軍の陣地を占領して行く。戦局は刻一刻擴がる一方である。

北京では反日會が抗日救國會と看板を新にして、經濟封鎖の戦法で吾々に迫つて來た。

對日經濟絶交。——天安門の朱壁には高々と彼等の新しいスローガンが掲げられた。

一、日本品を買ふな

二、日本品を使ふな

三、日本品を運搬するな

四、日本貨幣を持つな

五、日本船に乗るな

六、日本人と交際するな

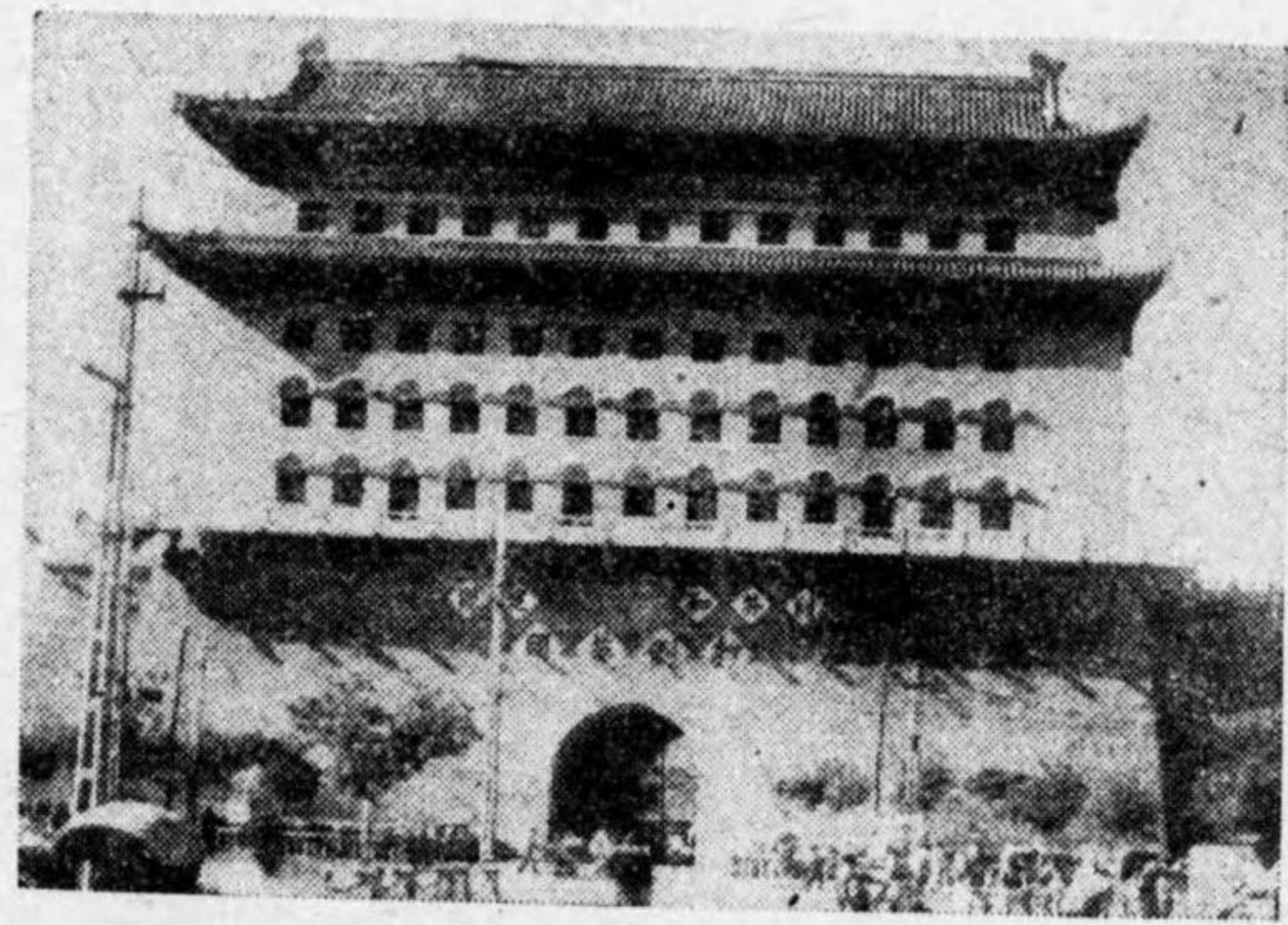
七、日本人のために働くな

八、日本人に食料を供給するな

九、日本の銀行に預金するな

十、商取引或は留學のため日本へ行くな

長安街の門や前門の箭樓にはかうした標語がペンキでデカくと書きつけられた。そして學生の日貨糾察隊が組織され、支那商店を餘さず調査して廻り、日貨をストツクせるものは一切これを登記せしめ、封印の上賣らせないことにした。



樓箭の門前

ところが日本商品を封印し出すと、各商店の飾窓の品物がからきしくなつてしまつた。そればかりでなく、彼等の生活に大なる脅威をもたらすことになつた。

燕の巢や鱈の鰭のやうな珍品が食べられなくなつたのに、大官顯紳達が第一悲鳴を擧げた。その他海參、鮑、貝柱、昆布等の海産品を始め、味の素まで使へなくなつて料理屋が大恐慌を來した。次は人絹、木綿類の反物やメリヤスの肌衣類が手に入らなくなつて、貧しい暮しの人や田舎のものが泣き出した。自轉車を取上げられて丁稚が不平をこぼした。その他マツチや洋燈の口金が取上げられて夜が眞暗になる。學生達は今まで使つてゐた三、四錢の日本鉛

筆が買へなくなり、外國製の本二、三十錢もする高價な鉛筆を買はされねばならぬといふ皮肉を見た。中でも一番彼等の困つたのは洋紙類が一切日本品なので、抗日會や新聞社で經濟絶交を宣傳する傳單や新聞が作れなくなつて、今更ながら彼等自ら自縛自縛の苦に陥つてしまつた。

やがて紙類とマツチ用藥品に除外例を認めて彼等は排日を續けた。若し民衆中に彼等の通告に服従せず、ひそかに日貨を賣買するやうなものがあると、それを發見次第、財産を沒收し、閉店を命じ、なほその上は體刑として罪状を書いた板を胸前に釣らして街中を引曳り廻したり、檻に入れて前門の前に恥をさらさしたりした。

彼等の狂暴なる魔手はそれのみに終らなかつた。日本商店の前には監視隊を立て、たとへ三錢のボタン一個、十錢の仁丹一袋買ふものさへ容捨なく抗日會へ拘引して豚箱へぶち込んだ。

吾々も食料品を手に入れるのに困つた。家内がお惣菜を買ひに行くことも見合さねばならなくなつた。幸に張君が買物一切を引受けてやつてくれたので、何とか凌がれた。

滿洲事變はなほも發展の一路を辿つて、皇軍は隨所に抗する者共を撃碎して、民衆の平和境をその後建設して行つた。中國の國民政府は自らの力のみでは到底滿洲を救ひ得ないことを悟ると、その常套手段たる以夷制夷の策に出で、問題を國際聯盟に持ち出して泣訴した。

國際聯盟からはリットン卿を委員長とする調査團が組織され、わざ／＼中國まで千里の道を遠しとせずして調査にやつて來ることになつた。

が、滿洲事變によつて救はれた三千萬の民衆は、既に彼等の久しく望みて得られなかつた王道樂土の建設に、活潑なる動きを續け、昭和七年三月一日終に新生

滿洲國を彼等の土の上に建設して、溥儀執政を彼等の上に戴いた。そしてよろこびの聲が滿洲全土をゆるがした。

私もうれしかつた。排日の垣塙の中から兩手を高らかに舉げて、心から萬歳を絶叫した。

滿洲は救はれた。三千萬の神の子は神國日本に救はれた。彼等の幸福はもう間違ひなく彼等の上に訪れてくると限りなきよろこびに打ち震へた。

聯盟調査團の一行が北京に來るといふ消息が齎されると、北京の街々には急に清掃工作が開始され出した。清掃、それは箒で街道を掃除したり、家の横の土塊瓦片を取片付けるのではない。大街や胡同に貼りまくられた排日に關する傳單、ポスター、宣傳文の清掃である。市政府からは毎日何百人といふ人夫が出勤して、タワシで電柱や壁上の標語を／＼やつたり、ペンキでデカ／＼書かれた城門や城壁の宣傳文を塗り消したりするのである。

北京はお蔭で全く美しい昔の懐しい姿に還つた。私は彼等のその姑息な手段に憤慨せざるを得なかつたが、半面、昔ながらの幽寂な古都北京の優雅さを取戻したのをよろこびもした。

三月九日、調査團一行は天津から暮色迫る北京に到着した。そして北京ホテルに投宿した。國民政府は顧維鈞を頭とする招待委員を任命して、下にも置かぬ歡待振りであつた。一行は十日間の滞在で滿洲に發つた。さうして三ヶ月間の調査旅行を終へて、六月五日再び北京に歸つて來た。七月半ばから八月一杯にかけて彼等は報告書を北京で作製して、九月四日に發つて行つた。

一行の滞在中一番吾々をよろこばしてくれたのは、排日が休業であつたことである。吾々は救はれた思ひで胸を張り、手足を伸ばして街を歩いた。

信者の家を廻つても誰もいやな顔をする者がなくなり、昔日の親しみが追々取り戻されていつた。私は前からの信者を起して廻るのに奔走した。信者達は再び

私達を中心にして集まつてくれ、月々賑かにお祭が勤められるやうになつた。私は再び賽の河原の石を一つ／＼積み上げていつたのである。

滿洲國では建國以來、王道樂土の建設に邁進すると共に、一面、邊疆地區において反滿抗日の迷夢から醒めないで、無益な遊撃的抗戰を續けてゐる匪團に覺醒の痛撃を與へてゐた。彼等は追はれ追はれて、奥地へ／＼と逃げ込んだ。

北支と滿洲國との國境線にも、自稱義勇軍と稱するかうした鼠匪が蠢動して熱河省の南境を侵してゐた。

昭和八年一月終に彼等に對する肅清戰が開始された。正月三日、先づ天下第一關とほこる山海關が皇軍によつて陥落させられた。續いて北支の北境、長城線の戰鬪が開始された。

北京の中國紙は又抗日一色に塗りつぶされ、失地回復、經濟絶交の聲が巷間に

満ち、反滿抗日の邀越なる傳單が電柱や壁上に氾濫した。

彼等の堅壘とたのむ長城の護りは間もなく撃破されて、彼等は西へ南へと潰走した。冀東の沃野は彼等の泥靴で踏みにじられた。

皇軍は逃げる敵を急追又急追、次第に北京、天津の地に迫つて来た。

五月二十一日、北京にも東方に遠雷のごとく砲聲が聞えてるやうになり、城壁上は勿論、各城門が城内の支那軍によつて固められた。市民は再び戦禍に怯え出した。市内には混亂の色が刻々と増して来た。

その朝、爆音勇ましく皇軍の飛行機が北京の上空に飛來した。光る銀翼、輝く日の丸を見た時、私は思はず部屋から飛び出して院子の真中で萬歳をさげんだ。何ともいへぬ心強さが腹の底から湧いて来る。お前達大丈夫だ、安心せよと空の上からいひ聞かせられてゐる思ひがした。

その日の夕方、一人の信者が駆け込んで来た。そして洋車から行李やトランク

を幾つも下して、その荷物を暫く私に預つてくれといふのである。

私は面喰つてしまつた。北京が戦禍の巷と化した場合、第一に危険なのは吾々日本人である。吾々でも避難の時は、どうせ命からがらか、たとへ持てゝも荷物一個を持出せるが關の山である。

私は運ばれた荷物の前で、責任持つてお預り出来ないから持つて歸つてくれと斷つた。

ところが信者は聞かない。どうでも預つてくれと拜むやうに頼む。さうして

『こゝは神様のをられるところですから、私は神様がきつと守つて下さると思ひます。よしこゝで中國兵に掠奪されても、それは神様が私に縁のない品物だと仰有るのと同じで、私はきれいに諦めますから、恐れ入りますが、どうか預つて下さい』

といふのである。私は、

『貴方がその信仰なら何ともいひません。私がこの家に居る以上責任を以つて保存致しますが、萬一をらなくなつてからは、取られても仕方がありませんよ。構ひませんか』

と念を押した。

『え、その時は徳がなかつたと思ひます』

たうとう私の家に品物を置いて、安心したやうな顔附で歸つて行つた。

不安な、一夜が明けた。

早朝から殷々と砲聲が聞えた。

今朝も○臺荒鷲が東天から勇姿を見せてくれた。正に北京の上空にかゝらんとした時、各處からけたましい機關銃の銃聲が鳴り出した。續いて砲聲が響き出した。

始まつたな！

私はひやつとして部屋へ駆け込んだ。  
城壁の上かららしい。爆音をねらつて間歇的に銃砲聲が轟いた。それもやがて爆音の消えると共に止んだ。

愈々北京も危険に瀕したことが、よく感じられる。私は祈つた。北京百十萬の人命を、どうかこの危機から無事に守つて下さるやうにと祈つた。

その午後、街々が急に騒しくなつた。聞いて見ると潰走兵が朝陽門から市内に雪崩込んだといふ話である。聞き終らぬ内に灰色の一隊がやつて来る。人々は家へ逃げ込んだ。店は戸を閉めた。街上には彼等が通つて行くのである。

ところが彼等は分れて、民家に分宿し出した。民衆は好むと好まざるに拘らず恐怖に怯えながらも、彼等の命令に服従するより途はなかつた。

私の家は東西南北、四隣は中國人が住んでゐる。ことに北隣とは紙張りの亞字窓一つの仕切りである。兵隊達が聲高にわめき合つてゐるのが、窓紙をふるはせ

で手に取るやうに聞えてくる。隣では一生懸命に御馳走の用意をしてゐるらしい。

辻々は歩哨が立つた。青龍刀を抜き放つて、街の警戒に當つてゐる。泥まみれの軍服、破れた泥靴、戦場焼けの獐猛な顔、血走つた眼。どう考へても血を見ずには収りさうでない。

しかも彼等は今朝まで皇軍の砲火に追はれたのである。命をかけて抗戦して来た者ばかりである。日本軍、彼等の頭にはこれが焼印のやうにおされてゐるに違ひない。反抗、復讐このためにはどんな惨虐をも辭せない戦慄が五體に狂奔してゐるに違ひない。

『日本人こゝにあり』と彼等に知られたら、もう最後、如何なる残忍さを以つてあの青龍刀に吾々の血潮を塗られなければならないか分らない。

私は家族を呼び集めた。表門を閉ぢさせ、容易に開かないやうに机や椅子を積

ませた。そして重要書類を院子の隅に集めさせて、何時でも火を付けられるやうにした。次に國旗を出させて神殿につらせ、衣服を更めさせて神前に集め、覺悟を決めるやう最後の申渡しをした。

私の聲も震へてゐる。皆の顔も蒼白である。誰も一言もいふものもない。

私は最後の勤めとして、皆にお神樂を上げさせた。

一つ、正月こえのさづけはやれめづらしい

二に、つこりさづけもろたらやれたのもしい

三に、さんざいこゝろをさだめ、

私は一心に唱へた。

妻と張君がそれに合はせて舞つた。

誰の目からも止め度のない涙がはらくと流れてゐた。

黄昏になつた。そしてお神樂が終つた。誰も表門を敲くものもなく無事であつ



た。

私は急いで夕飯を食べさせ、後始末を済ませさせた。そして神殿の電燈のみをつけ、他の部屋は全部消燈させた。夕勤めを勤めた。何事も無い。續いて再びお神樂を上げた。上げ終つても何事もなかつた。續いてまたお神樂を上げた。お神樂が終る度毎に神様に御禮申した。かうして、その夜はお神樂を上げながら過してしまつた。お神樂の終る度に、あゝまた命をこゝまで長らへさして頂いたと無限の感謝が湧いた。

夜が白々と明けて來た。私達も疲れてこれ以上我慢が出来なくなつて來た。私は心の中で、昨晚が峠だつたのだ。今朝まで無事なら、特別な事件が起らない限り、大丈夫だらうと思へるやうになつた。それで交替で二時間宛、そのまゝで假睡するやうに命じた。

正午になつたが何も起らなかつた。午後、再び皆でお神樂を上げた。一回終れ

ばまた一回、何回でも續けて行つた。

夕方が再び訪れて來た。お神樂の切りになつたので、夕食の用意を家内に言ひつけた。家内は厨房に入つて行つて用意をしてゐたが暫くして飛出して來た。

『貴方、變ですよ、隣に兵隊の聲がしませんよ』

『さうか』

と私は居間へ飛んで行つた。さうして窓紙の小さい破れから隣の家を覗いて見た。

ゐない。確かに兵隊はゐない。部屋の外に置いてあつた箱も鍋もない。私は、しめた、助かつたと思つた。そして大聲で張君を呼んで表門を開け、街の様子を見にやらしした。

表門から首を出した張君は、

『歩哨もゐませんよ』

と中へ怒鳴つて表へ飛び出した。私達も覗いて見たが兵隊の姿はどこにも見當らなかつた。

只家々の門に中國人が立つて往來越しに大聲で話し合つてゐるのみである。

張君は歸つて来て、彼等兵士は一時間程前に列を組んで西の方に出發したと報告した。

私はうれしかつた。夕餉の膳を圍んで三人は自分がどんなに恐ろしかつたかをやつと聲高に語り合つた。

夕勤めの後で、うれしさの餘り、三人でもう一度お禮の御神樂を上げさして貰つた。

私はこの危機を通り抜けたことにより、貴い體驗を得た。吹き募り來る排日の颶風も、其の後は一寸も恐ろしいと思はなくなつた。そして平氣で自分達の仕事に精進することが出来るやうになつた。これは大きな收穫であつた。一生の中、

またとない大きな收穫であつた。

梅津、何應鈞の塘沽協定によつて停戦となつたことを四、五日後に知つた。

皇軍の占領地區には冀東政府が設立された。そして間もなく河北、察哈爾の二省を統治する冀察政權が樹立され、北京、天津には親日的暖風が吹くやうになつた。

私達は私達の天與の使命に邁進した。人心の安定に伴つて道を聞かんとするものが次第に多くなつて來た。道は伸びた。私達の中國語もだん不自由なくなつて來た。信徒達の慇懃によつて佐藤日語研究所を創設した。そして仕事に堅い根が生え出した。

昭和十一年十一月、信徒達の熱誠によつて崇文教會が誕生した。その十二月に鈴鐺胡同から崇文門大街へ移轉し、こゝに百年不動の教會の基礎が固まつたのである。

妻

の

道

私は支那へ来て三年目、廿八歳で結婚した。妻は玉榮といつて、京都の堀川高女を卒業後、私の母校の姉妹校に當る天理女子學院で、三年間中國語を研究して来たものである。學院を卒業すると間もなく、廿一歳で嫁いで来た。

その當時私は、神から與へられた愛弟子張麗峰と、死物狂ひで傳道してゐた。丁度、厚い鐵板に小さい金槌で穴を開けようとするものゝやうに、信念と熱とに力を籠めて中國社會にぶち當つてゐた。

だが生活は苦力以下であつた。私は一年餘りの忍苦と工面とで七十元を作り出し、それで六疊の日本間を一つ用意したのが私の新妻に對する愛情の總てであつた。

私は毎月二十圓宛の傳道費を頂いてゐた。これは私一人分の傳道費であつたが、私はそれで張君との二人の生活をまかなつた。

だから、結婚の話が出て、私には到底そんな氣になれなかつた。私は生計の

上で完全に結婚無資格者であつたが、結婚後は三十圓宛送つてやるとの條件で、私は妻に苦しい思ひで結婚した。

妻の家は京都でも有數の盛大なる教會で、彼女は嫁ぐ日まで、生活のことで苦勞した覚えのない結構な身分であつた。お金に不自由したことがないだけ、お金には淡泊だつた。

妻は幼少から變つた心を抱いてゐた。それは彼女の父が彼女の顔を見ると口癖のやうに、

『お前が男の子だつたらなあ』

と嘆息を漏らしてゐた。後嗣の弟は父の晩年の子であつたからである。

『私だつて男の子と同じだけの働きをして見せるわ』

道　　の　　妻  
彼女は父の羨きを聞く毎に、かういつて、何事につけても男に負けたくないとい

心で勵んだ。

女學校を了へると京娘達はお嫁入りするまでの間を、お茶よ、お花よ、お芝居よと華かに着飾つて家事のお稽古に青春の夢を追つてゐるのに、彼女は中國語を學んだり、射場に立つて弓の稽古をしたりするやうな變り者であつた。

この氣持は彼女の信仰にも反映していつた。彼女は先人の苦闘によつて出來上つた教會の二代目、三代目の會長夫人として納まつて行くことを物足りなく感じ、自分の全生命を打ち込んでも男に負けない立派な仕事を、多くの人々のためになし上げ、父の心を慰めたいといふ強い信仰的意慾を燃え立たせてゐた。

と同時に傳道者たる母の貴き姿に、自分を母の延長として、母の通つた傳道生活そのまゝを中國語を介して支那の大陸傳道に刻みたかつた。

これが彼女を私の仕事に共鳴させ、素寒貧と苦勞を承知の上で私に嫁がせたのである。

私は結婚の條件の一つとして彼女に着のみ着のまゝで來ることを要求した。どうせ立派な着物をどつさり持つて來ても、私の力では着せて連れて行くところもなければ、そんな時間もなかつたし、その上、結局は一六銀行に流れるか、賣り飛ばして人救けのために何回素ツ裡にならねばならぬか分らなかつたからである。さうした時、惜しみの心を起させるよりか、一を始めから何もない方がすつぱりして埃を積まないと考へた。

しかし、彼女は與へられたいろくものものを相當持つて來た。彼女の兩親は、その外に支那服料として彼女に若干の金を持たして來た。

彼女は來て見てアツと驚いた。

『何もない、どん底生活だぞ、と仰つたけれど、本當に何もないのね』

彼女は呆れてかういつてゐた。

道具はなし、衣服もなし、肝腎の金さへない。彼女の今日までの小遣錢ぐらゐ

のしがない金で人間三人が生きて、そして活動して行かなければならない。その原動力たる『無い會計』を彼女は背負はされたのである。

私達は生計信條として、かう定めた。

- 一、持たぬ心になること
- 二、人から金を借らぬこと
- 三、買物は一切現金ですること
- 四、物は使へなくなるまで使ふこと
- 五、赤字を出さぬやうにすること

これは生計の常則に違ひないが、私には全く足枷手枷にも等しい厳しいものであつた。

私も家内も専門學校を卒業してゐる。何が苦しいといつても書籍を買へないのが何よりも苦痛であつた。新聞もなし、雑誌も取れず、本も買へない學的塾居生

活を我慢せなければならなかつた。それでもこれが中國人の救かることならと目をつむつて過ごした。

私達が新世帯に買ったのは、西洋タンス一本と食器若干とである。これで精一杯であつた。そして私は夫として愛妻のために中國服一着を作つてやつた。木綿のゴツ／＼した單衣の中國服、これが後にも先にも私が妻に作つてやつた唯一の着物である。妻はそれをよろこんで着てくれ、勇んで中國人のお助けに行つた。

大陸の日光は激しい。折角のその中國服も日光と汗とに一ヶ月も着ない中に、色がすつかり褪せて見る影もなくなつてしまつた。それから後は彼女は日本服をほどいてはそれを中國服に縫ひ直した。和服一着で中國服が二着取れるといふことをその時初めて知つた。

妻のセルを解き、浴衣を解き、銘仙を解きして妻は次々と身に合つた中國服を作つていつた。

私達は持たぬ心を信條としてゐる。餘分は持たぬことにしてゐる。彼女は彼女の着る半分を貧しい姑娘に與へて、二人お揃ひだとするこんでゐた。寒い冬が訪れても彼女は外套なしで出歩いた。外套を着ないのではない、着る外套を彼女は持たなかつたのである。それでも平氣で傳道に精勵した。

傳道は、その人の内に持つものが姿となつて現れてくるものである。私達三人のそれ／＼の持味通り三様の道がつけられてゐた。

インテリ階級の者の救濟は張君には苦手で、それは私の分擔となつてゐた。張君はひたすら商人や職人相手の道を進んでゐた。玉榮は婦人の指導教化を自分の仕事として考へてゐた。

三人は各自の分擔に突進した。皆負けず嫌ひといふ共通の性質を持つてゐるので、傳道ではお互に競ひ合つた。

毎月十八日の月次祭には各自の導いた信徒が參拜に来るのがうれしかつた。少い時でも二、三十人、多い時には五、六十人ものお參りがあつた。

南の三間、房子が神殿になつてゐる。これは私の家の中で一番立派な一棟で、土臺が他の家より五寸も高くなつてゐた。

部屋は一間を神床に二間を參拜所にした。一間は八疊敷の廣さがあつたと思ふ。中國人は疊に長時間坐ることが出来ないので、全部椅子式にした。

貧乏な吾々には澤山な椅子を買ふ餘裕がない。やつと祭官だけの椅子を用意し、後は板に脚を附けた腰掛にした。

祭典は午後二時から始めた。教師は教服を着用し、教徒は脊中に一つ梅鉢の紋を附けた黒の中國服を着た。

妻の道  
祝詞も漢文で作し、中國語で讀むのである。只、お神樂歌のみは教祖によつて節附けられたそのまゝを日本語で奉唱さして頂くのである。

中國人も中國音で綴つた御神樂本を手に、一緒に奉唱してくるのであつた。

八つ、病はつらいものなれど

元を知りたるものはない

九つ、此度までは一列に

病の元は知れなんだ

十ど、今度現れた

病の元は心から

私はチョン／＼と神殿内に響き渡る清澄な拍子木の音に合はせて、つたない口元で一心に唱つてゐる信者達の姿を見る時、餘りにも絶大なる神助に何時も胸が塞がつて來るのであつた。

私達にはロマンティズムもセンタリズムも許されなかつた。飽くまで現實主義に立脚した改革と建設があるのみであつた。秋水の刃を渡るやうな眞剣な日が

續いた。

多くの中國人の苦しむ姿、悩む姿を見てみると自分達のことなど一時も考へてゐられなかつた。

非常の決心で飛込んだものゝ、中國の生活に慣れるまでは彼女は相當苦しんだ。丁度私が始めて北京へ來た當時、種々なヘマを演じたと同じやうに、色々の失敗を繰返した。だが彼女は決してひるまなかつた。私にはそれが非常にうれしかつた。

中國を知り、中國人を知らんとするものは、どうしても一度は『日本的』といふ殻を脱ぎ、彼等に同化して行かねばならん。衣食住は勿論、時には吾々の一番大切な魂までも、必要となれば自分の心の奥の奥底の秘庫の中にしてしまはねば、彼等の思想、彼等の行爲、彼等の習慣は分るものではない。ことに吾々の



のやうに彼等と魂たましひと魂との連繫つながりを作り出さうとする者には、絶對ぜつたいに同化が必要である。

いくら良い教理けうりでも和服姿で説いては決して中國人を救ふことが出来ない。中國服で、中國語で、中國式な部屋へやで、中國人的な感懷かんくわいで説いてこそ、相手の胸むねを打つのである。

ことに相手に心的轉換しんてきてんくわん、懺悔ざんげ、心定め等をさせようと思ふならば、吾々が不知しらず不識しらずの間に出してゐる日本の香にほひを、少しでも相手に感じさせては、決して出来るものではない。

彼等はすぐ、それは日本の道德だうとくであつて支那の道德ではないとか、日本人には出来るだらうが吾々には出来ない、風俗習慣ふうふくしゆくわんが違ふから、と考へてしまふのである。

同化、すなはち『入郷隨郷』異國傳道には何よりも先づこれが必要なことで

ある。

妻は髪かみの結び方、お針の仕方、御飯ごはんの炊き方、お菜の作り方まで更あらためて行つた。同時に彼女の中國語は物凄ものすごいテンポで上達して行つた。一年も経たない間に私を凌駕りやうがせんばかりにうまくなつた。

ある日、お助けから歸つて見ると、妻は五人の色々な信者を相手に、誰にも平均へいに色々な話題わだいを捉へて話してゐる。しかもその中に信仰を織おり込んで、談笑だんぎょうの歡待くわんたいをしてゐるのであつた。

私は驚おどろかされた。と同時に、何だか知ら大きな安心を心の底かんに感じた。

彼女が来て一年餘り過ぎた時、ふとしたところから北京新聞社に居た瀧久馬といふ日本人が入信した。彼は鰥やもめぐら幕まくらしで四人の子供を抱へてゐた。彼は翌年一月、教校入學を懇願こんぐわんして止まなかつた。天理教こそ私を救つてくれる宗教だ。私は是



頭 窩

非布教師になつて自らをも磨き、人をも救ひたいと切なる願ひである。懇望もだし難く、彼氏を教校に送ることにした。と同時に彼氏の子供を預らねばならなかつた。瀧氏には借財こそあれ一文の財産もない。吾々に大きな負擔と責任とがかゝつて來た。だが人間一人の更生には替へられない。たとへ自分達の食分を減らしても救げなければ神様に申し譯がない。

五人は荷物を運んでやつて來た。急に家族が八人に膨脹した。これを月三十圓でまかなはねばならん、一通りの算盤では駄目であつた。

妻の提議で一同二食にし、窩頭生活を始めた。窩頭とは玉蜀黍や粟の粉で作つ

た黄色い蒸パンのやうなものである。粉が荒いので温かい間でも口の中でポロポロして中々喉を通らうとしてくれないが、冷えたらカス／＼で大鋸屑を頬張つてゐるやうで呑み込むのが容易でない。お汁かお茶がなかつたら到底喉を越す代物でない。だが、これが北支ではあらゆる常食物の中で最も安價である。凡そ米の半値で買へる。貧者の食物として、彼等から『黄金塔』と尊號を捧げられてゐる。

妻は張君と協力して毎日これを作つた。恐らく當時の邦人でこんな珍食で食膳を賑してゐるものは我が家一軒だつたらう。

二人の子供が毎日學校へ行く。お辨當だけは黄金塔を持たず譯にも行かず、妻は毎日神様にお供へするお洗米を炊いて持たしてやつてゐた。

道 妻 生活の一切が急迫して來た。家内は子供達に饑しい思ひをさせたくないとして化粧をしなくなつた。私にも禁煙令を命じ、散髪も八仙の安床に行かせて、一人分

の代價で子供と二人の散髪をさせた。一通四仙の手紙も注意して下さいと私にたのんだ。勿論、お救いは如何に遠方までも彼女は歩いた。洋車や六錢の電車は他人の乗物だといつてゐた。

やがて瀧氏は十八の長女と末の子をつれて日本へ立つた。十二の女の子と十の男の子が家内の手に残つた。かうして他人の子を預つて見て、私は子供を學校に通はすには相當の金が必要なることを妻から説明された。

かうしたどん底暮しの中へ、張君の田舎の親から彼の花嫁が決定したと知らせて來た。私はよろこびと心配との二重の氣持でこの報せを聞いた。

張君の結婚問題には以前から心を碎いてゐたが、吾々の手に了へないので、彼の兩親に一任して置いたのである。

嫁が定つて一週間も経たない中に結婚の日取りも決めたといつて來た。

私は慌てざるを得なかつた。早速、妻を呼んで相談した。

『張君の結婚が決つたといつて來たが、後一ヶ月餘りしかない。その間に費用を準備してやらなくちゃならないが、どうしたものだらう』

『貴方何かよいお考へがある』

『貧乏のどん底ぢや、食ふことが精一杯だ。瀧様一家でも居なければ、何とか都合のつけやうもあらうが……』

『貴方、人助けには不足は禁物ぢやありませんか』

『破戒して借金と來るか。それより仕方がないよ』

『まあ怖ろしい。神様とのお約束を破る積り。ようそんなことが平氣でいへるのね』

『だつて子供のためだ。儂が罪をきるよ』

道の妻  
『だから貴方は呑ん氣だといふのよ。子供が大きくなつたら結婚さゝねばならんことはきまつてゐるぢやないの』

餘りに平氣な妻である。

『何か心當りがあるんだな、お前に』

『……………』

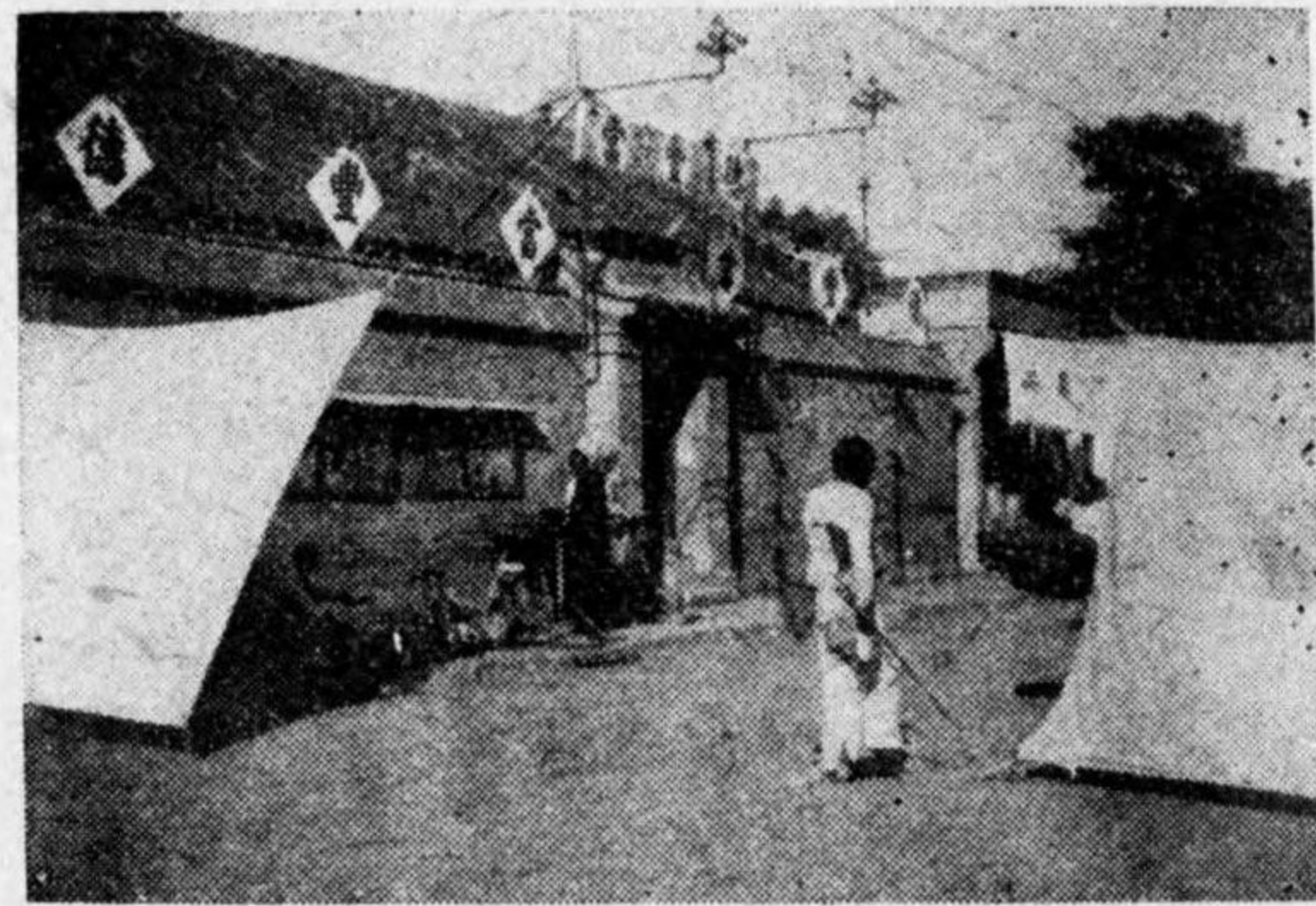
『僕は本當に心配してゐるのだから、いつてくれよ』

『ぢやいひますがね。私は前から張様の結婚の場合にと、父から貰つた中國服代がそのまゝ取つてあつたんですよ。それを使つたらいゝでせう』

『驚いたね。あのお金まだ持つてゐてくれたのか。有難う〜。今様山内一豊の妻こゝにありか』

心配が一時に溶けて、感謝が胸一杯に湧いてくる。私は妻の手を力一杯にぎりしめた。

張君はその金を押し頂いて、田舎に歸つた。そして間もなく結婚を濟ませ、花嫁をつれて歸つて來た。



質屋

一口一名増加。妻の負擔が又一つ重くなつた。

丁度その時、父危篤の飛電を受けた。私は長男である。歸らねばならぬが金がない。早速張君を當舖に走らせて、洋服や外套で旅費を作つて發つた。だが日本に着くまでに父は既に亡くなつてゐた。汽車で飛ばせば間に合へたものをと愚痴をいひたくなりさうだが、

人救けのためには…………と瞑目した。

瀧氏は六ヶ月の教校生活を終へて歸つて來た。再び妻は八人の生活を荷つて立つた。

私はこんなに呑ん氣に考へてゐた。

私は裸で母から生んで貰つた。そして裸の生活に還らうと北京にやつて来た。今裸になる時期が来たのだ。自分の贅澤からでなく、人救けのために裸になれるなら、宗教家としてこんな光榮はない。教祖がよい雛型だ。教祖の弟子は教祖に還るところに信仰の本道があるものだ。

私がこんな信仰なので、家内も張君も同じ氣持で進んでくれた。妻は毎日どん底生活の遣り繰りを、排日と傳道との戦ひの間に、勇んで切り廻して行つてくれた。

ところがその十月、妻の父が悪いといふ手紙を受けた。私達は愕然とした。異國に神命を流布するものは親の臨終に遭はれないとは覺悟の上だが、子の情としてこれ程痛苦なものはない。私は私の切なかつた苦い經驗から、すぐ妻を日本へ歸した。岳父の病勢が持ち直してくれたので、妻は子としての介抱が出来た。

だが岳父も十一月に遂に不歸の客となつてしまつた。夫婦共に、同じ年に銘銘の父親を失つてしまつた。虚な心に鞭を當て、貧窮と困苦の中に信仰を燃やし續けるのは容易でなかつた。峻坂を一足々々喘ぎながら登り行く登山家の姿そのものであつた。

私は妻の苦勞を有難く思つた。妻なればこそと思ふ日がよくあつた。妻はその度に、

『私は父から立派な餞を頂いて來てゐるのです。父は私が嫁ぐ日、私を前に呼んで、お前は今日から佐藤の人間になるのだ。どんな日柄を通らんならんかも知れん。御教祖様の苦勞と天秤にかけて、若しもお前の苦勞の方が重かつたら、儂はよろこんで家に入れてやるから歸つて來てもよい。しかし、軽いやうではどんなに泣いて歸つても、闕を一步も跨さぬ。よう覺えて嫁ぎなさい』とね』

妻はこの父の言葉に勵まされて、滔々と押し寄せる人生の荒波を押し分け、

雄々しくも進んでくれるのであつた。

その翌年の正月早々から私達は信者の懇願によつて日語學校を開設した。生徒達は僅かながらも毎月授業料を納めてくれるので生活が急に楽になつて來た。

妻はこんなことでは、傳道も伸びないし、日語學校も發展しない。もつとく苦しみを背負つて、たゆまぬ努力を捧げて行くところに、魂の光が増すのだといひ、私と相談して内地の大教會から月々郵送して頂いて居た三十圓の傳道費をお断りしてしまつた。

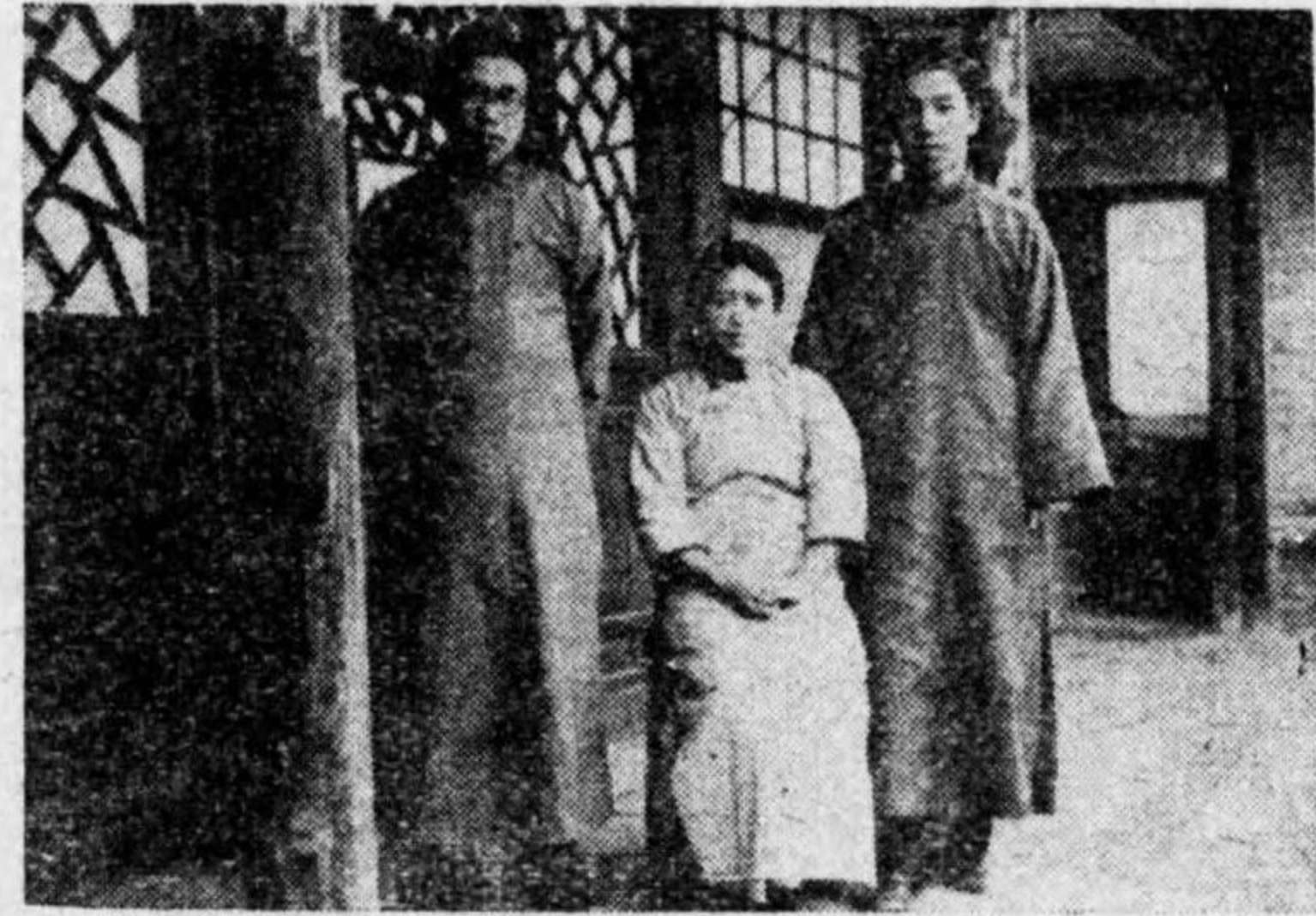
だが不思議なことに、入學式の時には僅かに六人しかなかつた學生が、晩れ馳せに編入を申込んで來るものがあつて、授業を始めると二十幾人に増加した。むしろ傳道費を頂いて居た時より収入が多額にのぼつた。

ほつと息つく間もなく瀧氏が十日許りの病氣で、春淺む二月の初めにぼつくり

亡くなつてしまつた。彼氏を救ひ上げようと色々苦悶して來た家内だけに、彼の死去は妻の心に大きな穴を開けた。凍つた風がその穴から體內へ吹き込んで來るやうに、妻は佻しい、はかないものを犇々と感じた。妻は末の子を膝に抱き上げてさめくと泣いてゐた。

日本人は有難いものである。兩親を失つた四人の遺兒に、在留同胞の温かい同情が潮のごとく寄つて來た。朝陽門外へ野邊の送りを濟ましてから、會計係の人から吾々は同情金を受取つた。中には子供を預つて養育しようといふ人や、養子に一人貰ひ受けたいといふ人さへあつた。だが横濱の彼氏の實弟から子供を送り返してくれとの電報が入つたので、子供の件に關することは實弟の方と直接に交渉して頂くことにし、三月三日の船で温かい同情の結晶を、そのまゝ子供達に持たせて内地へ發たせた。妻は我が子をさらはれたやうに暫く蒼い顔をしてゐた。

私達の瀧氏に捧げた心は終に救ひの實を結ばずに、神から終止符を打たれてし



達私の代時同胡錫鈴

まつた。

瀧氏に亡くなられ、子供に歸國された妻は心の淋しさを擧げて、日語と傳道に注ぎ込んだ。學生の中から續々と信者を生み出して行つた。

日語を習ひに来るくらの學生は、その家庭が皆相當に裕福であつた。そのため、學生から入信した者は、經濟上にも追々と吾々を援助してくれ出した。妻の手元も次第に樂になつて來たが、彼女は自分の着物一枚買はうとしなかつた。相變らず、繼々の襦袢や靴下で満足して、餘分の金は神様へのお供へや、教會の神具や、道具を買ふために使つた。

日語學校開設に當り、或る日本人信者が、御禮の意味で電燈を引いてくれた。一番よろこんだのは妻であつた。

『私は近視で、人以上に眼が弱く、ランプの光でお裁縫したり、事務を執つたりしてゐると、すぐ疲れてくるのです。これで、どれだけ私の眼が樂をするか判りません。結膜炎にも、もうならなくて済むでせう』  
妻はこれまで夜晩くまで仕事をしてゐたが、いつも、結膜炎で醜く眼蓋を腫らしてゐた。彼女がいふ通り、その後は滅多に眼を患はなくなつた。  
その後或る婦人が妻に家庭で日語を教へてくれと頼みに來たので、彼女は毎日その家に通つた。

妻の道  
卞夫人といつて相當の家庭の奥様である。毎日洋車で迎へに來、洋車で送り届けるのである。その内に二人はとても仲良くなつた。卞夫人は妻を芝居や活動に案内したり、家で御馳走したり、まるで姉妹のやうな親しさである。或る時、卞

夫人は妻に立派な贈物を届けて来た。

吾々は頂いたものは、たとへ林檎一つにせよ、菓子一片にせよ、一度神様にお供へしてでないと、手が付けられない習慣であつた。

卞夫人からの頂き物も、神前に供へて開かせて頂いた。立派な絹の支那服地である。それに裏地までが、見立てゝ一緒に入つてゐる。家内は、

『こんな立派なもの、勿體なくて、私着られませんわ』

とよろこびながらも、身分に過ぎた立派さに、どんなに處置して良いか迷つてゐる。

『儂だつたら、仕立てゝ着るね』

私がかう簡單にいつたので、

『まあ、驚いた。どうしてこれをそんなに平気で着られますか。自分の徳に負けますわ』

家内がまだ不安な氣持でゐるので、説明してやつた。

『これは卞様を通じて神様がお前に下さつたんだ。だから仕立て着て、卞様の家へお禮に行きなさい。それで卞様がお前に着て貰はうと思はれた心を満足さすだらう。これが卞様のこの贈物をせられた心の本當のお救いだ。身分不相應なんで、神様の心も判らずに簞笥の中へでも仕舞込んで置いたら、それこそ神様から叱られて取上げられてしまふぞ』

『ほんとな。違ひないわ。私早速仕立てさして貰はう』

家内はよろこんで、當時にとつては身分不相應の着物を仕立上げて着てみた。

『よく似合ひますか』

『花の顔一際麗し』

『冗談言つちやいやですよ』

妻も女である。美しい着物を着るとうれしさが一層溢れてくる。匆々として卞



夫人の所へお禮に走つた。

これを最初として、妻は信者達から、次々と服地を頂いた。中には親切に裏地を添へ裁縫師まで來させて、身に合つた流行型の服を仕立てゝくれるものさへあつた。妻は見違へるやうに美しくなつて行つた。

私は或る日家内と語つた。

『僕はお前に中國服をたつた一枚しか作つてやれなかつた。然しお前はそれをよろこんで着てくれたらう。お前は結婚の時、親から中國服料として相當のお金を貰つて來たが、それをすつかり張君にやつて、彼に嫁を持たせた。お前は初めから、服では不自由せなくても良い徳分を持つてゐたのだつたが、それを人救けのために、全部捧げてしまつた。金はそれでなくなつてしまつたが、徳分は決して消えうせたのではない。たゞ一時、地の中に埋められたのだよ。その徳分の芽が次々と生え、實が成つて來たのだよ』

『本當に私もさう思ふわ。勿體なくてね。この間も三軒から三つ一緒に頂くんでせう。私勿體なくて涙が出たんですよ』

『全く有難いことだ。こんなことは世間では滅多にないことだ。だがね、僕はお前にもう一層感心してゐることがある。それはいくら澤山頂いても、お前は何時も自分のものは一枚きりしか残して行かないことだ。次々に困つてゐる誰かに着せて行くことだ。これこそ限りなく與へる道だ。僕はこれには全く頭が下るね』

『だつて私の身體は一つですもの、どんな立派な着物でも二つは一緒に着られませんか。後生大事にしまひ込んでおくより、皆が着てよろこんでくれる姿を見る方が、どれだけ楽しいか知れませんか』

『そこだよ、流れる水は常に新しいからね。よい雛型を通つてくれる。僕は感謝するよ』

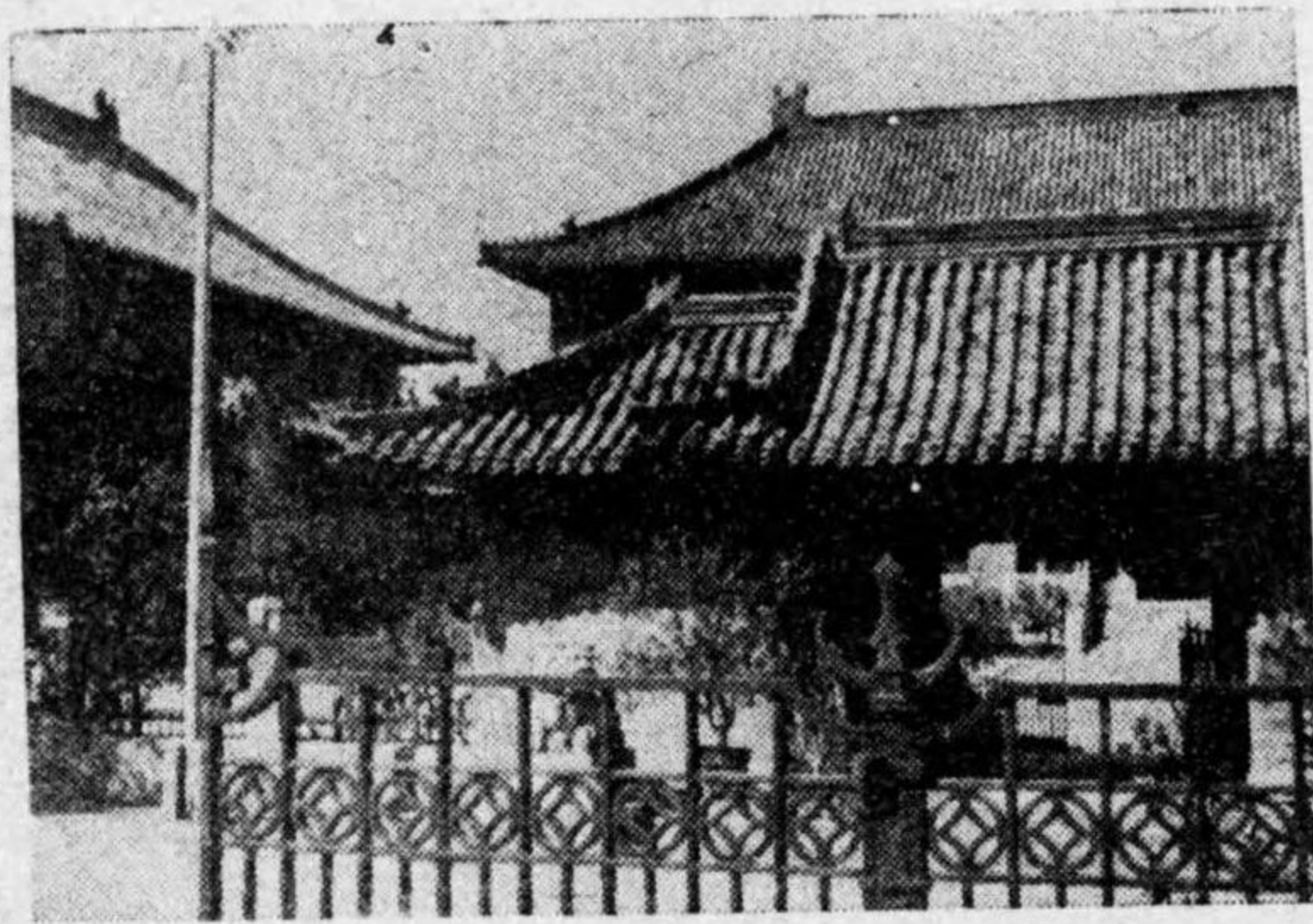
持たぬ心は次々に不思議を生んだ。吾々はこの不思議な神の攝理に驚き且つ感

謝し合つた。

その後信者は段々に増加して行き、傳道所は日一日と賑かになつて来た。莫様といふ信者が出来て、張君と一緒に教校へ入學してくれるまでに教線は伸張して行つた。

卞夫人もその後、妻の導きから入信して、自動車で屢々お参りに来るやうになつた。妻は相變らず毎日日語を教へに行つてゐたが、或る日身體の具合が悪いから暫く休んでくれとのことであつた。

半月ほど過ぎたが卞氏から何の消息もない。或る日、妻は心配の餘り尋ねに行つた。ところが夫人は蒼い顔して床に就いてゐる。聞いてみると、三日後に入院して開腹手術を受けなければならぬとの話である。腹腔内に氣腫が出来てゐるのである。妻は早速おさづけを取次がして頂いた。そして夫人に諄々とお話を説



院病—ラエフクツロ

いた。

妻は家へ歸つて来て、今日の夫人の容態を私に語り、皆でお願ひ勤めを勤めてくれと頼んだ。私達はお願ひ勤めをさして頂いた。妻はそれから三日間斷食して

お救けに運んだ。私は願ひのしるしを神様に  
お供へした。

卞夫人は北京最大といはれてゐるロツクフ  
エラー病院に入院して手術を受けた。経過は  
非常によかつた。一家の人々は愁眉を開い  
た。やがて夫人は退院してお参りに来た。

『先生、奥様、色々御心配お懸けしました。  
有難うございました。お蔭で、病氣はすつか  
りよくなりました』

六ヶ月ばかりの日語ではなかく大したものである。

『私を日本へ連れて行つて下さい。本部の神様へお参りします』

夫人はお禮参りに日本へ行きたいといふのである。私達は、すぐにも連れて行つて上げたいが、皆忙しくて、誰の手もあかない。その内、機会を作るまで待つて貰ふことにした。

北京にも秋聲の聞える頃になつて、卞夫人の待ちに待つた機会が神から與へられた。當傳道所から四人の青年が教校別科に入學のため、妻が連れて行くことになつたからである。

八月二十日一行六人は北京を出發した。そして卞夫人は本部でお授けを頂き、東京、京都、大阪を廻り五十日間の旅行を了へて、十月の初めに北京へ歸つて來た。妻はずつと支那服を着て、何時も夫人と起居を共にしてゐた。

秋の日本は夫人を十二分によろこばせた。美しい山容、稔れる野原、清冽なる

河川、見るもの總てが繪であり歌である。彼女達は松茸狩までして日本の秋を心

ゆくまで味つて來た。すべてこれ北京では求めても得られない楽しみであつた。

夫人は日本に着いてから習得した日本語を實際に使ふのだからとて妻に物をいはせず、切符や土産を買つたり、荷物を預けたり取つたりすることから、所を尋ねたり宿の交渉をしたりすることまで、曲りなりにも皆自分でやつてのけた。

夫人は日本から色々の良いことを學び取つて來られた。

この旅行には、それにも増しての喜びがあつた。それは、卞夫人は結婚六ヶ年子供がなかつたが、歸國後間もなく懐妊し、主人を非常によろこばされた。

妻が北京へ歸つた翌日から、私は宿痼の痔瘻が再發して、ばつたり床に就いてしまつた。

私が倒れたので、傳道所は時計の針が止つたやうになつてしまつた。日常でさ

へ忙しい私達であつたので、妻は困り果てた。毎日相變らず信者は參拜に来る。お救けに運ばねばならん。日語學校は繼續せなければならん。妻の小さな肩に山のやうな大きな責任が懸つて行つた。教務、日語、家事、看病、どの一つとして捨て、置けない問題ばかりである。妻の身體には一分の餘祐もなくなつた。彼女は死物狂ひで、獨樂のやうに働き出した。彼女の身體がどんなに綿のやうに疲れてゐても、休む暇がなくなつてしまつた。

日語の教室で、講義をしながら居睡り、學生に起されて、眞赤になるやうなことが起り出した。

私は見るに見兼ねて、幾度も立ち上つたが、三日として續かず、又バツタリ倒れてしまひ、その度に病勢は悪化の一路を辿つて行つた。私は終に立てなくなつてしまつた。

二人は相抱いて泣いた。苦闘九年、漸く開いた中國傳道の道が最後の一簣に崩

れんとしてゐるのを考へた時、私達は譯もなく泣けてくるのであつた。私は一切を妻に委ねて、養生のため故郷京都に歸つた。

妻は留守の後を受けて奮闘した。決して夫に心配かけまいと夜を日に繼いで働いた。そして教祖五十年祭が執行されるのを機會に、五名の信者と二名の教校入學生とを育て、團體に参加して歸國して來た。

詰所で彼女と遇つた時、私は彼女がまだ僅に二十六であるのに、四十女の強靱さを彼女の身内に感じ取つた。

私は五ヶ月間の靜養で、何とか身體が使はして頂けるやうになつたので北京に歸つて來た。

妻はホツとしてくれたが、もう私の身體は元通りの身體ではなかつた。忙しい用務に熱中してゐると、何時の間にか又五日に一度、三日に一度は疼痛に苦しめられるのであつた。妻の肩からは大きな荷物がどうしても取れなかつた。

それでも、私は病苦を、妻は病夫をかゝへて傳道一路に邁進した。結構な御守護が次々に躍つて、教會の土地が買収され、建築の計畫が進められてゐた。

或る日、卞夫人が大きなお腹を抱へて夫君と一緒に參拜に來た。見るからに落ちさうなお腹である。家内は、

『卞太太、大きくなりましたね。もう間もなくでせう』

『えゝ、もうすぐです。豫定日が八月の五日ごろです。私はそれで困つてゐるのです』

妻は不審に思つて、

『どうして困られるのですか』

夫人は恥かしさうに、

『これは私の我儘かもしれませんが、私のかゝり附けの醫者が八月一日から北戴河へ一ヶ月餘り避暑に行くのです。私は是非私が出産するまで出發を見合せてく

れと頼んでゐますが、外人ですのでなか／＼聞いてくれません。私は外の醫者にかゝるのが嫌なので困つてゐるのです。

奥様、神様のお恵みを頂いて七月中に生まして頂けないでせうか。さうするとうれしいのですが』

玉榮は一寸むつかしい問題だが本當に氣の毒に思つた。

『卞様、それは困られますね。だが神様は貴女の心次第で、どんな不思議も見せて下さいますよ。心配なさいますな。神様が聞いて下さる下さらぬは第二として、誠眞實の祈りと實行をして下さい』

『えゝ私、毎日お参りしますから、どうかしつかり仕込んで下さい』

それから卞夫人は毎朝缺かさずお勤めに參拜しに來た。夜の晩い中國の上流階級の人々には早起は一つの苦行である。普通は大抵十時か十一時にやつとお目覚めである。早朝五時や六時のお勤めの時間に合ふことは容易なことではない。し

かも臨月のお腹を抱へては非常の決心が在る。

卞夫人はお参りに來ては、あちらこちら掃除して歸つた。家庭では夫婦二人の生活に七、八人の召使を使い、部屋の掃除は勿論、蒲團の上げ下げも彼等にさしてゐた夫人であつたが、その上、妻から一時間宛いろくとお話を聞かして貰つてゐた。

夫人が祈りの生活に入つて十日ほど過ぎた或る日の午後、彼女から電話が掛つて來た。それは晝過ぎから急に下腹が痛んで來たから、これから病院に行くとの知らせであつた。彼女は最後に、

『どうか、神様に安らかに生まして頂けるやうにお願いして下さい』

と附加へてたのんで來た。私達は早速お燈明を上げ、お願い勤めをさして頂いた。

その日の夜の十時頃、無事男兒出産、母子共に健全の快報が病院から掛つて來

た。神様は八月一日より二日前、卞夫人の望み通りに安産さして下さつたのである。

その後間もなく、教會の買收地に神殿建築の工事が始められ、十一月には崇文教會の設置を本部から許され、落成を待つて十二月三十日、遷座移轉を行つた。

十四間、五十六坪の家から四十五間、三百坪の教會へ。一足飛びの大飛躍である。日々の經費も急激な膨脹を示して、何としても數字の結末が赤色に染つて來る。妻は自分の持物をどんく消却しては赤字を防いで行つた。うれしい苦しみとはこのことであらう。やつと四、五ヶ月の奮闘でそれを食ひ止めた。

或る日妻はお救けから歸つて來て、

道 妻  
『あのね、貴方。私この頃こんなことを考へてゐるんですがね。北京に幼稚園が是非一つ欲しいとね。今日もお救けに彼方此方へ参りましたが、六つ七つの子供



幼稚園と日語學校

アツと鯨聲を上げてそこへたかつて行くのですよ。さうして飴玉とか、蘇花だとかを、一錢二錢で買つて、埃まみれの手で抓んで食べてゐるんですよ。私は見てゐてハラ／＼しましたよ。中國人の賣る駄菓子なんて、衛生も何も考へないで作つたものばかりで、あんなものを口にしてよう病氣に罹らないものですね」  
『うんさうか。確かに北京の子供は可憐だよ。一體性質からして中國人か日本人

が、胡同の埃の中で彈球兒して遊んでるんですよ。日本人の子供もゐますが、あの埃の中に坐つて一生懸命になつて硝子玉を弾いて勝つた負けたといつてゐるのですよ。そこへ支那の玩具屋が銅鑼を鳴らしてやつて來ますと、子供達はワ

か分らない。入場料の要る公園は大人のもんだし、運動場はなし、窓の少い中國家屋で生活し、冬は十一月から三月までは、身を切る寒さに、乾燥と埃の室内生活だ。

現地の兒童は、青瓢箪で體質が悪いとは内地での定評だよ。實際、北京は子供にとつて沙漠だからね』

『民團でどうして幼稚園を作らないんでせう』

『經費の問題だよ。小學校の維持で一杯なんで、餘裕がないらしい』

『私は實際、今日あの子供の姿を見て可哀さうになりましたよ』

私達は二人共子供が好きである。結婚して九年になるが私達にはまだ子供がない。神様から頂けないのである。その日は北京の子供について二人は話に花を咲かせた。

私達の信者が多くなるにつけ、中には日本人と接觸面を持つてゐる中國人もゐる

た。或る日、さうした信者の一人で謝といふ人が教會へ參拜に來た。そして不満  
顔に、

『先生、私の知つてゐる或る日本人が、私のこの教會の徽章を見て、何の徽章だ  
といふので、私はこれは天理教の徽章です。私は天理教の信者ですといひます  
と、その日本人は馬鹿だな、天理教なんか信仰する奴があるか、段々貧乏させら  
れるぞといふのです。私は憤慨しましてね。私が天理教を信仰をしようがしよ  
うまいが貴方と何も關係ありませんがな、といつてやりました。どうして日本人は  
自分の國から發生した立派な宗教を貶すのでせうね。私はその人の氣が知れませ  
ん』

と私達に慇へるのである。家内はこれを聞いてこれは困つたと感じた。

『謝様、それはね。日本人の中にも色々な人がゐますよ。神様から救けて頂いた  
ことのない人は、或は天理教の惡評をするかも知れませんよ。本當の天理教のこ

とを知らないのですもの』

かうしたことは、今日までに幾度も經驗したことである。折角救ひの道に進ん  
でくれた者でも、他の日本人からの攻撃と、邪魔とのために折角の清らかな信  
仰を濁らされて、挫折した者も既に五、六名はある。そんな時、私達は本當に情  
けない氣持がする。中國人を救ふためには先づ日本人より救はねばならぬとさへ  
突き詰めた考へを起すことさへある。何とか良い方法と對策とを考へて置かない  
と、今後信者の増加につれてかうしたことは頻發することが豫想された。

明けて正月。まだ引越荷物も纏のかゝつたまゝである。とにかく神殿と應接間  
とを片附けて新年を迎へた。朝から日支の年賀の客が詰め懸けて來られる。皆そ  
れ／＼接待に多忙である。

多くの客の中に信徒總代の宮永康御夫妻や、私の傳道初期より傳道を支援して  
下さつた信者の系川氏御夫妻、それに小學校訓導の大塚先生も來られた。年賀と



落成の兩方の祝詞を述べられてから、宮永様は、

『奥様、かう立派に出来まして、空いた廣いお部屋もあるやうですが、この空いた部屋を利用して幼稚園をお始めになつたら、どうですか』

妻は一寸驚いた。

『さうですね。だつて誰が子供達の世話をするのですか』

『奥様がなさつたらよいぢやありませんか。北京の子供達はどれだけ助かるか知れませんか。北京には幼稚園がないんだもの』

『まあ、私が先生になつて……。私とても駄目ですわ。子供様を御預りするなんて』

家内は二度吃驚である。子供は好きでも幼稚園などは到底手に及ばないと、大塚先生が、

『奥様、是非幼稚園を始めなさい。小學校でも低學年の生徒の教育には、とても

腐心してゐるのです、日本的に育つてないのでね。私達も應援しますよ』

と熱心に勧められる。

年始の挨拶はすつかり幼稚園の話で持切りである。宮永様は、設備費ぐらゐは私が負擔するから、是非實現して欲しいとの熱心さであつた。

私も妻も考へさせられた。とにかく先づ吾々は幼稚園なるものゝ實態を知悉しなければならぬ。話はそれからである。

私はその月の十五日天津傳道廳の月次祭に參拜した序に、天津日本幼稚園を參觀に行つた。長井園長や保母の先生方に逢つて、色々設備、保育法、經營等のお話を伺つて歸つて來た。さうして家内と相談したが、妻も頭をかしげてゐる。

良いことに違ひない。北京として必要なものに違ひない。だが私に出来るか知らう？　これが妻の不安である。

妻は早速手紙を認めて、大教會長様の御意見を伺つた。すると、園の經營は他



園 稚 幼

の事業よりも至難であるが、途中で倒れない  
覚悟があるなら、やつても良いといふ御意見  
であつた。私達はこれに元氣附けられた。  
私達は日支の子供達のために、又居留邦人  
に私達の華人傳道に對して理解と協力を得  
るために、そして最後に未だ生れざる私達の  
子供のために。かうした私達の祈りの仕事と  
して、幼稚園開設を決定した。

私は先づ最初は日本人の子供達を預ること  
を主張した。さうして本當に子供の保育に慣れてから、  
中國人の子供へ進出することにしようと決心した。

園の準備は私達の貧弱な力に傳道廳と宮永様の御支援を頂いてとつた。そ

して子供達の世話は妻の同窓生の今川ふさ女史が擔當することとし、當局の許可を得て六月一日に開園式を舉行した。

保育室、事務室各一室、保母二名、園兒二十名といふ小さいものであつたが、在留邦人は勿論、各方面から大變なよろこびを頂いた。

妻はそれから、朝は可愛い子供達と一緒に、午後は悩める中國人を相手とし、夕には中國の若き男女に日本語を教授し、一日中身體に隙と暇のない生活に没頭した。

教會移轉、幼稚園開設、目まぐるしい進展が一段落して、ホッと息附く間もなく支那事變が勃發した。凄じい世紀轉換の車輪がゴロゴロ音を立て、中國の上を毎日通つて行く。皇軍の果敢なる戰鬥によつて、北支の天地は次々に新しい息吹が吹き込まれて行つた。

幼稚園も、日語學校も、休園休校状態に入つた。然し翌年一月、治安やうやく

恢復したので、再び開校した。

妻は再び園と學校とを、自分の樂しき祈りの行として荷つて行つた。

しかし妻はそのために傳道上の仕事を忽せするやうなことは、決してしなかつた。信者のためにはどんな忙しい時間をも都合して彼等に親切をつくした。

或る年の春、通州傳道所の所長が、同所の信者の問題で妻に相談に來た。

それは信者の李某といふものが、通州より八十支里東にある香河縣の或る農家から麥を多量に購入した。ところが平素から李に對して、快からざる感情を持つてゐる無賴の徒が、彼の取引を公定價格を無視せる闇取引なりと香河縣公署に誣告したので、李はその麥の賣買を禁止されるばかりでなく、縣公署の未決監に收容されて圜圍の苦を嘗めねばならなくなつた。この消息を受けた張所長は、李某の無實の冤罪なるを知つたので、何とかして縣公署の誤解を解き、李を救つてやうと奔走したが方法なく、終に當教會を尋ねて、妻に語り、良い方策を授けて貰

はとしたのである。

丁度、私が所用にて歸國中だつたので、一切の責任は妻が背負つてゐたのである。

妻は所長からこの話を聞き、憐憫の情壓へ難く、その翌朝、所長をうながして通州に行き香河縣公署に直接談判に出掛けた。當時、通州と香河縣との間には多くの匪賊が蟠居してゐて、交通が非常に危険であるが、妻はその危険を意に介せず突き進んだ。一臺の自動車を雇つて通縣公署の警察隊員五名に護衛を頼み、通州より八十支里の危険區域を突破して香河縣公署に至り、闇取引でないことを證明して、李某の釋放を請うた。妻の誠意が通じてか、李某はその後まもなく釋放された。

妻の道  
妻は思ひ詰めたら、水火をも辭せない強い力を發揮することが屢々あつた。  
病人を救ふために斷食したり、徹夜して介抱するくらゐは大して苦しいことで



問慰院病軍

はなかつた。

『精神さへ緊張してゐたら、何でもありませ  
んよ』

とこともなげにいふのであつた。

幼稚園も妻の努力によつて順調に育つて行  
つた。園児も一年々増加して行き、保姆の  
數も追々増加して行つた。

そして毎年秋にはお遊戯會を催し、中國側  
幼稚園をも招待して、幼兒と幼兒の日華親善  
を計つたり、又、軍病院その他各部隊を慰問して、傷いた白衣の勇士に久々の家  
庭的な集ひを催したり、無邪氣なお遊戯に楽しい半日を爆笑の中に慰めたり、又  
戦塵によごれた勇士達に心の憩を與へたりした。

これは園児やそのお母様方に良き影響をおよぼした。園児は自分のお遊戯に  
て、勇士達を慰めて、それが子供の忠義の道であることを知り、母親達は子供の  
奉仕の姿に、己の進むべき道を自覺し、益々時局の認識と奉公の聖道とを進むと  
いふ風に、各方面に良き響きを與へて行つた。

妻は又園児の母の會を組織して、或る時は修養の講話を聞き、或る時は洋裁や  
代用食の講習會を開催して、彼女達に生活向上の方法を誘導し、不用品交換會を  
催しては物資愛護の一途を計つたりした。

昭和十二年開園當時は全く赤字であつた園の經費も、妻の努力によつて二、三  
年の間に黒字になり、多くの保護者達の力をいたゞいて園の設備も次第に増加し  
て追々不備な點を除去して行つた。

昨今では保姆六名、園児百五、六十名の、北京における最大の幼稚園にまで成  
長した。先年中國人信者の熱誠に建築された崇文教館を、遊戯室としてピアノの

音も麗しく、園児達にお唱歌を唱はせたり、お遊戯をさせたりしてゐる。

妻はそれでも家庭における時や傳道にたづさはつてゐる時は、相變らず中國服を着、中國語を話してゐる。

或る日、張彭年君の女の子が病氣で寝てゐると聞いたので、妻がお助けに行く  
と、七つになる彼の男の子が、妻に向つて、

『師奶奶、僕は日本のお嫁様を貰ふんだ』

といふのである。それを聞いて張君の奥様が笑ひながら、

『お前のやうな黒い顔をしてゐる者には日本のお嫁様は来てくれないよ』

といつた。すると男の子は、

『お母ちゃん、山本様はどこのお嫁様を貰ふの』

と尋ね返した。母親は、

『それは、山本様は日本のお嫁様を貰ふにきまつてゐるよ』

といふと、男の子は、

『山本様はあんなに色が黒いのに日本のお嫁様が貰へるのなら、僕だつて日本のお嫁様が貰へんことはないよ』

と一同を笑はした。母親は、

『お前、そんなこと日本の方の前でいふものぢやありませんよ』  
とたしなめると、

『師奶奶は日本人ぢやないから、構はんぢやないの』

と平氣でいつてゐるので、皆が又ドツと笑つた。中國人信者の子供は、私のことを師爺爺といひ、妻のことを師奶奶と呼んでゐる。先生であるお爺様、先生であるお婆様といふことで、自分の親が先生の弟子である、その子であるから自分は先生の孫であるといふところから、かう呼ぶのである。

道の妻  
張彭年の息子は、妻を日本人ではないと今でもいひ張つてゐるのである。

妻は今でも、與へられるものを喜んで、身に着け派手な着物になつたり、地味な着物を着たりして、お救けにいそしんでゐる。

外套も、靴も、首巻も、手袋も、妻の身に纏はれて居るものは、殆んど信者を通じて神から頂いたものである。與へることを知つて求めることのない妻であるのが、唯一つの例外がある。

妻は、

『私は四十になるまで傳道と事業に私の全生命を捧げて行きますから、四十になつたら北京大學に入つて、私の好きな中國語を研究して下さいね』  
これが彼女の唯一つの求めるものである。

ア  
イ  
ウ  
エ  
オ

昭和八年頃である。

成不成を神に委ね、眞暗の闇の中を神の聲を頼りに突進して來た華人救済の道も、その頃には信者七、八十名といふ豫期しない素晴らしい結果を生み出してゐた。

朝と夜とは私のところに、きつと二人や三人の中國人が集まつて、世間話に花を咲かせてゐた。

私は彼等の信仰を如何にして、強い大きなものにしてやらうかとそれのみに心を砕いてゐた。こゝに思ひ浮んだのが日語教授である。

先づ我が天理教は日本の宗教たる故、彼等の曲げられた日本觀を是正し、眞の日本の姿を知らしめて、日本に親しみを感せしめねばならぬ。而して、眞の日本を理解し、日本を愛せしめるためには日本語を知らしめるとだ。その心の基礎の上に天理教信仰を植ゑ付けてこそ、最も堅固な信仰を把握せしめ得ると信じた。そこで私は青年達を集めて、傳道の餘暇を利用して彼等に日本語を教へ出し

た。

二人の青年が毎晩習ひに來た。

アイウエオ

カキクケコ

朗かな日本語の聲が私の茅屋から聞え出した。ランプの下で、石板を眞中にして、二人は熱心に日本語を覚えていつた。

街にはまだ排日の嵐が強かつた。彼等は打倒日本帝國主義の標語を掲げた城門をくゞり、時には戒嚴令の銃劍に怯えながらも通つて來た。

『人ガ居マス

机ガアリマス

先生、人ガアリマス

机ガ居マス

どうしてこれはいけませんかと質問したり、

『花ガ咲キマス』

花ハ咲キマス

ハとガ、どんなに違ひますか』と尋ねたりした。

私は日本語を教へてみて、日本語はむづかしい言葉だと痛感させられた。私自身研究せずして、到底異國人に教へられるものではないと思ひ、夜晩くまで研究をした。が、研究すれば研究する程わからないことが多くなつて來た。私が喋り、私が書き、私が讀みしてゐて、すつかり分り切つてゐる筈の自國語に、私は説明の出來ないものが澤山あるのに吃驚した。

しかし私は、これも傳道の一課目だと考へ、撓まず研究を續けた。

私は日語教授、即ち傳道だと考へた。

青年達に日本の書籍を讀む力を與へ、それによつて本教の出版物を讀まし、御神樂歌を讀まし、私のもどかしい中國語で説き切れぬ信仰の世界の深さを悟つて欲しかつたのである。

新しい荷物——日本語教授を背負つてから、まるで一心不亂になつてしまつた。信者の家庭訪問の道々でも、日本語が頭に浮んで仕方なかつた。

『挨拶……挨拶……挨拶……』

折角磨き上げた靴が、轍で崩された埃を蹴上げて、眞白になるのも知らずに、こんな言葉を繰返しながら道を歩いてゐた。

私はもう四、五日も『挨拶』といふ言葉に引掛つてゐる。

花子、小母様ニ御挨拶ヲシマシタカ。

課長ガ挨拶ヲ述ベラレル。



彼奴ハ挨拶ガ悪イネ、

ハハ……、御挨拶デスネ

頭に浮ぶこの四つの『挨拶』が皆違つた意味を持つてゐる。何と説明してやれば、この意味が分つてくれるだらうか。考へれば考へる程、私には分らなくなつていつた。

私は日本語で苦しみながらも、日本語を教へて行つた。

片假名の五十音から始めた彼等も簡単な會話が出来るやうになつた。私は次の平假名を教へた。そして平假名が覚え終るのを待つて、お神樂本を讀ませてみた。漢字がない上に變體假名があるので中々讀みにくさうである。だが根氣良く教へて讀めるやうになつた。私は早速節を附けて唱はした。一週間もすると兎に角歌へるやうになつた。

次の月の月次祭の日、私は二人を交替で私と一緒にお神樂のお地を上げさせ、

家内と張君とに御神樂を舞はした。次の月には、お地は彼等二人だけで唱へるやうになつた。

私は御神樂歌の唱ひ方を教へながら、その中に盛られた教祖の信仰を彼等に説いて聞かせた。これが私のねらひ所である。私は私の中國語によりをかけて熱心に説いた。彼等二人も少しは信仰が進んだやうであつた。

かういふ風にして私は四、五人の青年に日本語を教へた。さうしてお祭には必ず御神樂歌を唱はした。

日本語の時間以外には、彼等に遠慮なしに教會の仕事を手傳つて貰つた。さうして他所から頂いた菓子や果物は皆で分け合つて楽しく食べた。

私達と彼等との間には次第に隔りが取れていつた。私達も本當に家族のやうに思へて來た。

或る日彼等は、

『先生、こゝに日本語の學校を作つてはとうですか。先生の中國語の力なら、きつと生徒が集まりますよ』

『日本語學校？ この排日の中を誰が来るかね』

『いゝえ先生、排日が盛んだから来るのです。日本と戦はんとするものは先づ日本を知れ』と學生間に叫ばれてゐるのを御存知ですか。彼等は今、日本の明治維新を一心に研究してゐますよ。日本を知らうとするには、日本の本を讀まねばならんでせう。日本の本を讀むには日本語を研究せなければなりませんもの、先生私達ばかりに教へないで、學校を作つてそこで一般の人々に教へるようになさい。私達も御手傳ひしますから』

青年達の意見は皆同じである。口を揃へて學校を始めよと勧める。

私は恩師に手紙を書いて御意見を伺つた。傳道の邪魔にならないなら、やつても差支へなしとの返事を手にしたので、いよく學校設立に着手した。

家の東房二間の天井や壁を貼りかへて、二十四人分の机と椅子とを用意し、黒板をかけてこゝを教室にした。

幸ひ日本人信者で電燈を引いて下さる人があり、長い間のランプ生活から足を洗ふことが出来た。

規則書、ポスターの印刷、新聞廣告、申込書等々準備を進めて行くと、豫想外に出費が多い。なけなしの財布の底を拂つても足りない。非常手段として物を賣つたり、當舖へ行つたりしてやうやく整へてホツとした。

昭和九年一月八日、名も佐藤日語研究所として蓋を開けてみると、生徒は僅かに六名、だがその六名は學生、教員、官吏等で、粒が揃つてゐるのでよろこんだ。かうして私の家からはまたアイウエオの清爽な聲が街へ流れ出した。

授業は毎晩午後六時開始、八時終了の二時間授業で、六ヶ月を一期として、初級班から始めた。初級を了へたものは續いて高級班を編成してこれに入れ、一ヶ

年で大體日本語の外線だけを教へる計畫で進んだ。

私は文の構成等の點までは研究してゐないので、會話に重點を置いた。學生達はその方を望んだ。

その頃北京には十二餘りの大學があり、各大學共に日本語を盛んにやつてゐた。その他にも日本語を教へる私立學校もあつたが、その教員は殆ど中國人であるため、そこに學ぶ生徒の發音は天から成つてゐなかつた。

コレハ日本ノ國旗デス

私ノ帽子ハ二圓デス

讀本には正しく振假名が附いてゐても、彼等はこの通りに讀むのである。何回も何回もあきらまれる程直しても直らない。苦心してやつと直しても、その翌る日には又元に戻つてゐるといふ状態である。種々調べてみると、『マッチ』『切手』のやうに、真中で詰まる促音が中國語にはないこと、他の長音を短く、單音を長く

讀む癖は、中國語的に讀むからだとなつた。

私は朝から傳道に従事し、信者の家々を廻つて教へを説き、夕方から教壇に立つた。

教壇は私の戰場であり、日語教授は私の傳道であつた。日本語を通じて日本國體を語り、日本文化を説き、日本の民族性を論じて、彼等に新しき眼を開かすめ、正しき自覺を促すやうに努力した。

當時、支那には對蹠的な二つの潮流が相激し、相食み、旋渦を卷いて横流してゐた。

一つは古きを捨て、歐米の皮相を追ひ、ひたすら時代の尖端を進まんとするもので、他の一つは新しきものを排撃し、いたづらに五千年の腐殻に立籠らんとするものであつた。

ハイヒールに斷髮、長い眉毛、赤い唇、肩まで腕を露した旗袍に肉體の曲線を

波打たせて、若い青年に腕を借し、英語で男女同権を論じながら散策の快味に酔ふ新しき女性。

片手に鳥籠、片手に長煙管、指頭のかくれる長袖の藍布大褂、褲子の下を黒の腿帶で、蹠も痛い程繋り付け、外來品の靴下なんて穢はしいと、ごつ／＼の市布の襪子に布鞋を穿き、孔子曰くを金科玉條と墨守し、斬髮令出で、久しきも、なほ後頭に豚の尻尾を垂らしてゐる老爺。

同じ北京の街上に吾々はかうした二つの姿を見かけるのである。

彼等の思想も行動も常に相剋の様相を露呈してゐた。一步進んで洞察すると、彼等は兩者共に何等國家的な見地や社會的な立場から、正しき批判をも深き内省をも下すことなく、その總てを自己の欲するまゝの野生的な好惡によつて決定付けて行くのである。

老人は若者を馬鹿にしてゐた。

四書五經も讀めず、聖賢の道の分らぬ奴に何の政治だ、何の經濟だ。今の學生は讀んで字のごとく、學校で『生むことを學び』教師は彼等に『育てること(妊娠の意)を教へて』教育をしてゐる。貞節地を拂ひ、自由戀愛の惡風が人間を鳥獸にしてゐる。見よ、墮胎の日に多く、離婚訟訴の絶えない姿を。——と。

青年は青年で老人達に反抗の白い齒を見せてゐた。

何だ老耄奴が。苛斂誅求、搾取の限りを盡して民力を弱め、國土を賣り、利權を譲り、たゞ私腹を肥すに汲々、豪華な邸宅を構へ、妻妾を抱へ、阿片の煙の中に糜爛した享樂生活を送つてゐる亡國奴達奴が——と。

事實、彼等には正しき批判の目がない。温かい同情の念に貧困である。協力の歩みを忘れてゐる。たゞ己の欲するまゝに行動する一つ／＼の散砂に七か過ぎない。その上、もつと大きな忘物は、何故かくあらねばならぬかといふ自省の念に缺けてゐることである。彼等は足下に大きな忘物をしてゐながら、それに氣づか

ずに向ふばかりを見てゐるのである。

私は青年の舊套打破に賛成する。又老人の尙古の美風にも頭が下る。だが彼等は何故それを結んで、新しき彼等自體のものを生み出して行かないのかと嗟かひしかつた。

それには日本を彼等に知らしむるより他に方法はない。あらゆる文化を限りなく吸収して、然も偏せず伍せず、素晴しき血肉と消化して、己を養ひ發展せしめて行く日本の姿こそ、取つてもつて彼等の引路燈となすべきであらうと考へた。

私は教壇上で屢々このことに言及して脱線した。肝腎の教科書が二、三行しか進まなかつたことがよくあつた。だが生徒達はそれをよろこんだ。放課になつても歸らず、私にもつと色々聞かしてくれと居間に入つて來る者さへあつた。

その年の夏、吾々夫婦の母校たる天理外國語學校並に天理女子學院の支那語部

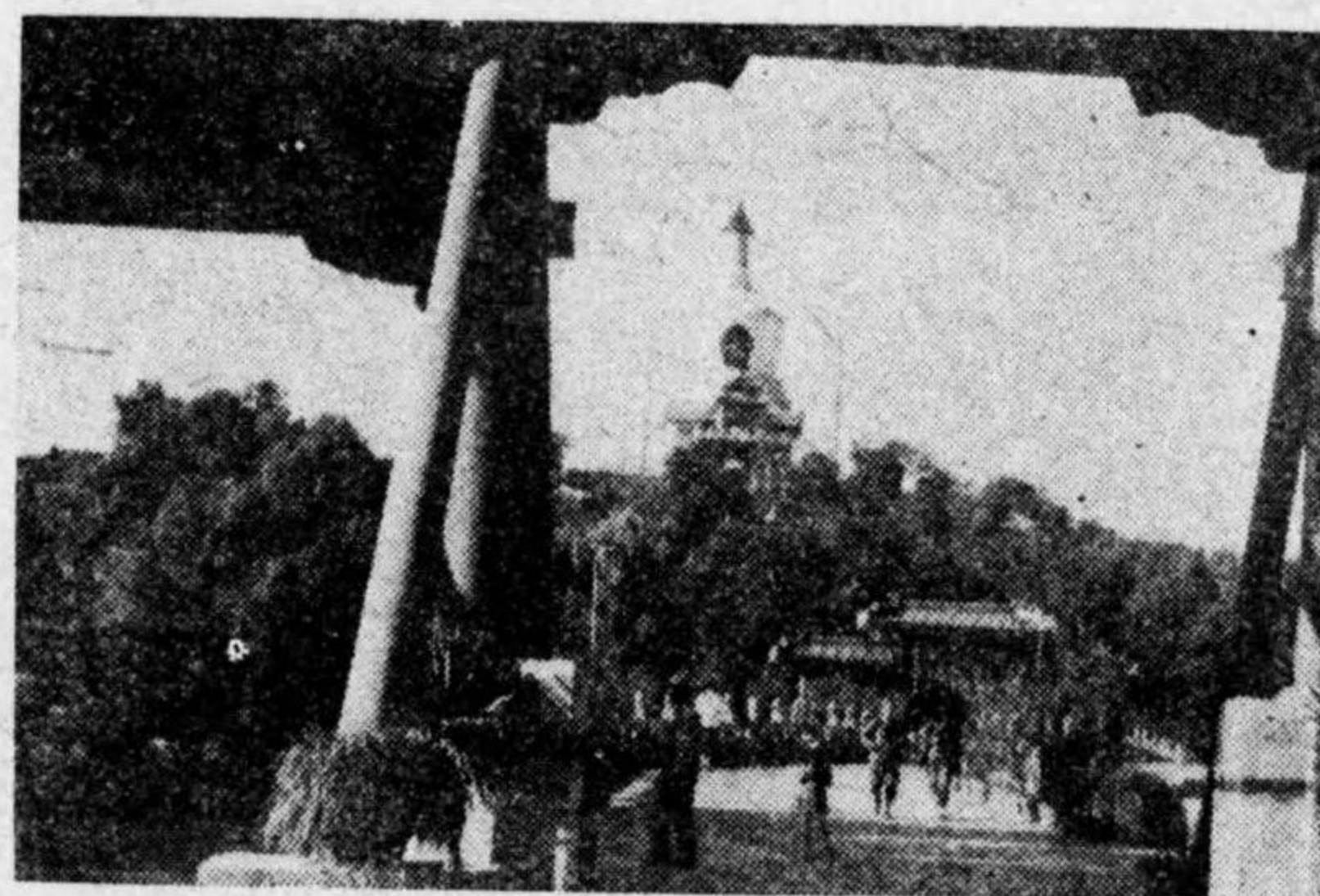
生が例年の通り鮮満支旅行團を組織して二名の教授に引率されて來燕した。

滞在二十一日間、男生は中國の公廨（下宿）に、女生は先輩今川女史の傳道所に宿泊した。

私達は一夕、彼等を招待して、私の手許の日語生との交歡會を催した。

院子に机を列べて彼等を交互に坐らせ、各代表の挨拶を習つてゐる言葉でさせ、演説のしたい者には演説を、歌の唱ひたい者には歌を唱はせ、互に打溶けた氣分で若き熱情を吐露せしめ、續いて座談會に入つた。

日本から來た學生は、北京滞在の二十一日間は自由行動を許されてゐるが、彼等には研究したい幾多のテーマを持ちながら、適當なる中國人の友達を得ないので存外な苦心をしてゐた。中國の學生も日本の友達を持たないので、會話の練習に不自由を感じてゐた。それだけ彼等は兩方面からこの催しをよろこんでくれた。



園公海北

要するに氣の合つた友達になり合つてくれるのがこちらの望むところである。

月光の下、晚香玉の芳香を送る涼風に、額の髪をなぶられながら、日華兩國民が國境を越えて相親しむ姿は時ならぬ親善風景を呈し、私はひそかに苦心の報はれたことをよろこんだ。

解散後、彼等は、

『王様、明日十時頃にお訪ねしますが、よろ

しいか』  
とか、

『田中様、明晩私が北海公園に案内致しませう』

等と、互に温かい友情を露してゐた。  
結果の素晴しさに驚かされた私は、その後も毎夏、來平する後輩のためにこの試みを繰返して行つた。

教室は神殿の隣にあるので、生徒からよく天理教の説明を求められた。私はさうした生徒に對しては授業終了の後、夕勤めに参拜させ、それから本教の説明をしてやつた。

日が経つにつれて、彼等は私が如何に中國を愛し、中國のために幸福を希求してゐるかといふことが分つて來るものが出來、終にその中から劉印忱、王英之、單光普の三名が入信してくれた。

私はうれしかつた。私の日本語教授の發願を神が聞き届け、御加護をお垂れ下さつたのだと思へてうれしかつた。

私の日語學校創立は、本教として始めての試みであつたゞけ、内地、現地を問はず賛否交々の批評を下された。

多くの人々は、良いこゝろみだと讃めて下さつたが、中には、外道だ、宗教家の墮落だ、と酷評する人もあつた。それはかういふのである。

『大衆は宗教家の熱せる行に動かされるものである。宗教家に燃えたぎる信仰がある時は、人々は必ず集まつてくる。たとへ何處へ隠れやうが逃げやうが、何時の間にか探して集まつてくる。そして奇蹟が躍動する。』

然し、内なる信念の焰が弱つてくると、誰も寄り集まりもしないし、奇蹟も躍動しない。かうした場合、窮餘の策として、なされるのが宗教家の教育事業であり『社會事業だ』と。

これには一面の理があるかも知れないが、普遍的な見方ではない。確に私の學校はさうした動機から生れたのではない。

喧々囂々の中を押し切つて、始めたゞけ貧乏もしたし、苦しみもした。

だが、私の道が正しいものであつたことを、私は三名の學生信者によつて神から證明されたやうなうれしさを感じた。そして彼等を何でも強く大きく育て上げたいと種々に心を砕いた。

私は遠慮なく教理を説いた。『神秘的靈能』だとか『宗教的罪惡』だとかいふ言葉をそのまゝ、中國語で話してもよく分つてくれるのでうれしかつた。

私は彼等にも御神樂歌を教へ、進んで御神樂踊りも教へた。教へながら神樂歌に遺された教祖の歡喜の信仰を一つ／＼語つていつた。このやうにして彼等を天理教徒、否、中國の更生に必要な要材に育てゝいつた。

第二回の募集をその半年後に行つた。第一回生は高級班に進級した。私と妻とが教壇に立つた。二人は力を合はせて奮闘した。

多くの學生の中には彼等の名前を日本語讀みにすると面白いのがある。

岳 泰 志 (樂隊師)

徐 仲 三 (女中さん)

錢 冕 祺 (洗面器)

秦 幼 泉 (信用せん)

吳 新 節 (御親切)

名簿をとりながら、笑ひが喉元までこみ上げてくるのをどうすることも出来な  
い時があつた。

生徒と會話をしてゐるとなかく面白。

『王様、貴方は今日公園へ行きましたか』

『ハイ、私は今日が公園へ行きでした』

『王様、一寸間違ひましたね。私は今日公園へ行きましたか』……でせう。もう

一度いつて御覽なさい』

『私は今日公園へ行きました』

『よろしい。それでは宋様。貴方は昨日市場へ行きましたか』

『ハイ、私は昨日市場に美しいの花を買ひました』

『宋様も一寸間違ひましたね。私は今日市場に行つて……』行つてを忘れまし

たね。市場に行つて美しい花を買ひました。美しいの花、間違ひです。美しい

花……が正しいです。さあもう一度いつて御覽なさい』

『私は昨日市場に行つて美しい花を買ひました』

『よろしい。よく言へました。それでは次……馬様。今何時ですか』

『今、七時十五分です』

『それではもう一度尋ねます。貴方は今朝何時に起きましたか』

『私は今朝五時起きました』



『一寸いけませんね。私は今朝五時に……』にを忘れましたね。五時に起き

ました。もう一度言つて御覽なさい』

『ハイ、私は今朝五時に起きました』

『よろしい。アッ！鉛筆が落ちました』

趙君の鉛筆が、黄色い音をたて、足下に落ちた。私は早速趙君に、

『誰が鉛筆を落しましたか』

と尋ねた。趙君は立上つて、

『私が鉛筆を落しました』

『よろしい。それでは金様、何處から鉛筆が落ちましたか』

金君が隣のものと話をしてゐるので當てゝ見た。彼は一寸狼狽したが、

『ハイ、机から鉛筆が落ちました』

『イ、エ、間違ひましたね。よく考へて御覽なさい』

彼は首をひねりながら考へてゐたが、

『机の上から鉛筆が落ちました』

『イ、エ、まだ間違つてゐます。どこが間違つてゐますか、誰か……』

『ハイ』

『ハイ』

趙君と宋君が手を舉げてゐる。

『宋様』

『ハイ、机の上から鉛筆が落ちました』

『よろしい。さうです。何處が間違つてゐましたか。宋様』

『ハイ、鉛筆が落ちました、間違ひです。鉛筆が落ちました、正しいです』

宋君はよく間違ひを正した。

『さうです。鉛筆が落ちましたはいけません。鉛筆が落ちましたがよろしい。ど

うしてごせう、誰か？』

『ハイ、ハイ』

手を舉げてゐるのはやはり前の二人である。

『それでは趙様』

『ハイ、落しましたは他動詞です。他動詞はその上にをを附けます。鉛筆を落しました。正しいです。落ちましたは自動詞です。自動詞の上にがを附けます。鉛筆が落ちました、正しいです』

『よろしい、よく説明しました』

私は黒板の上に、

鉛筆を落しました 他動詞

鉛筆が落ちました 自動詞

と書いて説明をし直した。

彼等のむつかしいとするものは、第一はテニオハであり、次はかうした中國語でも區別のつきにくい言葉であつた。

學校の評判は内容の充實と共に良くなつて來、北京の彼方此方に知られるやうになつて來ると、個人教授や出張教授を依頼に來るものが増加して來た。私達は傳道に支障を起さない範圍において求めに應じた。さうして中國人との連繫を多く持つやうにした。

私は卒業の回を重ねる毎に六ヶ月や一年ぐらゐの日本語教授では、到底人材も出來なければ、日本語の完成を期することも不充分だ。どうしても生徒達と長期に涉つての連繫をつけ、吾々が絶えざる指導と鞭撻とを惜まないところに所期の目的を達成することが出来るのだ。それにはどうしても彼等と宗教的師弟關係を結ぶことが自分の立場として最も簡便で近路だ。それによつて一生彼等の周圍に

立ち、常に教導の手を差し伸べて行くことが一番よい方法ではないかと考へるやうになつた。

私の活動は活潑になつた。どんく／＼學生の中に入信者が出来出した。

師弟關係には厳格な中國人である。一度師としてその門をくゞつた以上、彼等は一生涯の徳を稱へて、自分がどんな顯官貴紳に立身しようが、常に席を譲り、影を踏まず、弟子としての儀禮をつくして行く。彼等の麗しい美徳である。

私は或る日、長く病氣で缺席してゐた生徒を見舞つてやつたことがある。

私が行くと彼等は一家總出で歡待してくれた。生徒の病氣は大分良くなつてゐて、もう一週間もすれば學校へ來られるやうになつてゐたので私は安心した。

彼の父は私を正房に請じ、正面の紫檀の椅子に掛けさせて、子供の就學態度を根掘り葉掘り尋ね、私に尙一層の教導を頼むのである。そして言葉をついで、

『先生は私の豚兒の老師ですから、若しあれが勉強を怠つたり、先生のお言附を

守らなかつたりした場合、遠慮なく叱つたり、たゞいたりして勉強さして下さい。私達も幼時、師について四書五經を習つた時は、よく先生から棒でなぐられたものですよ。中國では先生が生徒を勉強さすために敲き附けるのはかまはないのですよ。どうか遠慮なしに、厳しく仕込んで下さいませ』と附加へた。

古い國だけに、麗はしいものが残つてゐるなあと感嘆させられた。

排日の風が街々に荒れ出すと、流石に學生の缺席が多くなる。彼等は缺席の理由をこんなに訴へるのである。

『先生、僕達は排日運動自體が怖いものではありません。排日が起るとその風潮に乗じて色々の社會惡が横行するのです。

私の友達でこんなのがありました。或る晩、抗日救國會の者だといつて、五、六名の青年が彼の家に侵入して來て、お前は日本に情報を賣つてゐる漢奸だ。これ

から家宅搜索すると、友達の辯解も聞かばこそ、二、三人で家の隅々まで掻き廻した結果、堆房の隅の箱の中から出て来たといつて、一束の親日宣傳ビラを目の前に突き付けられたのです。友達も家族のものも、そんなものを取扱つた覚えがない。しかし、知る知らんに拘らず證據が上つては仕方がない。そのまゝ救國會に引立てられ、終に刑場の露と消えました。その宣傳ビラは抗日救國會の奴等が藏して持つて来て、家宅搜索によつて出て来たやうに粧うたのです。國民黨員に怨みを買ふとこんな目に遭はされるのです。

私達は毎日先生の所へ來たいのですが、日本語を日本人に習つてゐるといふことを盾に、どんな難題を吹き懸けられるか分らないのが恐ろしいのです。

こんな意味で缺席さして頂き度いのですから、どうか悪く思はないで下さい。それから、私の名を誰にも知らせないで下さいね』  
彼等は皆かうした恐怖心を抱いて戦々兢兢々と怯えるのである。

が中には勇敢に一日も休まず、熱心に通つてくるものもあつた。

滿洲事變後一時急激に燃え上つた日本語熱の波に乗つて、北京には私立の日本語學校が大小合計二百餘個所簇出した。

中には晝間、日本人經營の日本語學校に生徒として通學、夜間は自ら教鞭を執つて、堂々と生徒に日本語を教へてゐるといふやうなインチキ學校さへあつた。日本語學校の看板さへ掲げれば、立ちどころに五、六十名の生徒は集められるといふ素晴らしさであつた。

私はこの現象に考へさせられた。  
僅か六、七ヶ月の日本語を習つて、後は教科書と参考書とを命の綱として奇怪なる日本語を教へて行く中國人教師、誇大廣告を好餌とし、商業的打算に立脚して生煮えの中國語で日語を教へてゐる日本人教師、これ等の人々によつて教へら

れて行く日本語は果してどんなものだらうか、どんな結果を齎して行くだらうかと考へた時、慄然たるものがあつた。

日本語教授は嚴肅なものでなければならぬ。決して戯れや商品として教へるべきものではない。日章旗に對する吾々の信仰と同様の信仰を捧げてこそ、本當の日本語の有する意味を傳へられるのだと氣附いた。

それから私は先づ自身の日本語を再検討した。東北ズーク辯でもいけない。ヒトシやイとエの曖昧な東京辯も駄目である。其の他關西、四國、九州それ／＼の國の訛は一切排撃しなければならぬ。かうして再検討を加へて行くと、自身自身のアイウエオさへ疑はしくなつて来る。私はもう一度アイウエオから再出發し、平素の言葉遣ひは勿論、發音にも注意して正しき日本語を私自身が話すやうにした。と同時に日本語を外國人に教授する者は誰もがかくあつてほしいことを願つた。

一時白熱的に燃え上つてゐた日本語熱も、四、五年の間に次第に下火になつて来た。各所の日語學校と共に生徒も次第に減少して行つた。加之、突風的に起る排日の嵐にあふられ、中國人側のインチキなものから續々と閉鎖して行つた。また、日本人側のも維持困難で廢校するものが出來て来て、以前の十分の一の數にまで激減した。この淘汰の嵐の中を、吾々は青年信者に守られながら、何等心配することなく突破して行き、卒業生も四、五百名に達するやうになつた。しかし、社會はまだ／＼日本語を要求してはをらなかつた。わざ／＼東京に留學しても、彼等は折角の技能を活かすことも出來ず、不遇に甘んじてをらなければならなかつた。だが天の時は間もなく到來した。

支那事變の勃發によつて、萎靡沈滞の日本語熱が再燃した。然も今度は決定的な運命を負はされて燃え上つた。

卒業生達は浮び上つた。今こそと言はんばかりに各方面で必死の活動をした。

建設の最前線に立つて建設部隊のよき耳、よき口となつて活躍した。私はこの姿を見て筆舌に表せないよろこびと感激とを覺えた。中でも第一回卒業生の劉印忱は其の後入信し、教會に大いに盡力してくれた。そしてこの事變後、山東鹽務管理局長の重職に就任、新中國建設の重要な任務を帯びて活躍してゐる。

信仰に結ばれたものゝ中からも、私の力と頼む弟子達が續出した。教會の基礎となり、私の教化事業を盛り立てつゝある中心的人物、莫震盈、張彭年、張靜軒、葛覺堯、趙華堂、卞徵は皆一度私から教へられた者である。そして今尙、各方面から社會の淨化に挺身してくれてゐるのであつた。その後、中國語部をも併設し、學校名も崇文天理日華語學校と改稱した。そして新しき生氣を加へながら、新秩序建設の一石として奉公の道に邁進してゐる。

私は今もアイウエオを叫んでゐる。多分將來もこの北京の一角から私はアイウエオを叫び續けるでせう。これは私の支那人に對する祈りの聲でもあるから。

## 心の道場

渡支して六年、迂餘曲折の道を辿りながらも、私の念願は樂しき實を結び出してゐた。

幾度も排日の大浪にさらはれながらも、私の周囲には試煉に耐え得た五、六十名の信徒が残つてをつた。しかも彼等は大浪から吾々を護るために強く堅く結束してゐた。

そこには國境もなく民族もなく、たゞ同じ神の子として、親なる神に結ばれた救け一條の精神に、お互の心の鍊磨と精進とに勵んでゐたのである。

私の家は心の道場である。主宰者は神で、吾々は一様に磨かるべき受鍊者である。いくらかでも磨かれた者から、それ／＼神の命のまゝに力一杯の勤めを果して行くのである。勤めの中に吾々の心を磨いて行くのが吾々の行である。

日語學校が心行の足場として出來た。そこから多くの求道者が輩出した。その中で多少異彩を放つてゐるのが一人あつた。彼の名は莫震盈といひ、中國

大學の半途退學生であつた。

彼の家庭は裕福で祖父母、父母、彼夫婦に二人の子供といふ、所謂『三代同堂』といふうらやましい家庭で、祖父時代に手に入れた家作で安らかな日を送つてゐた。

彼は私に付き纏つて私から道を聞くのである。夜暗くまで残つて色々と話を聞くのである。家内が心配して、

『莫様、もう歸らないと、お家で心配してらつしやるかも知れませんよ』  
とうながしても、

『いや大丈夫です。まだ早いですから』  
と何時もこんな調子である。

教へた御神樂歌もすぐ覺える。お神樂の手振も覺える。さうして入信して三ヶ月目には吾々傳道師と一緒に月次祭のお神樂に立てるといふ成人振りを見せてく

れた。

或る日彼は、

『老師、私は老師の傳道の姿を見て感心しました。わざく、日本から来て種々の不便や困難と戦ひながら、吾々を救ふことに全生命を捧げられる。』

生きては中國の肥となり、死しては中國の土とならんとさへ仰有つてゐられる。吾々がこの尊いお姿を見て、ジツとしてをられませうか。私も天理教の傳道師となつて、老師の後塵を拜したいと思ひますが、なれるでせうか』

と思ひ掛けない相談である。私は即座に、

『傳道師になる方法はありません。しかし莫様、天理教の傳道師は他宗の布教師のやうに月給があるのではなく、どんな苦勞にもよろこんで耐え得る覺悟がいらいますよ。どんな反對攻撃も笑つて通られますか、どんな貧乏の中もよろこんで進めますか。なか／＼むつかしいですよ。まあ一寸普通の人には續きませんでせう。』

もう一度考へ直して見なさい』

といった。莫様は、

『苦勞するのは覺悟してゐます。老師の通られる苦勞ならどんな苦勞も一緒に通ります。どうか傳道師になることを許して下さい』

としがみ附かんばかりの熱心な懇願である。私はそれから教祖の立教の苦心、先輩先生方の辿られた荆棘の道、私の嘗めた苦勞等々、開教を志す者が誰しも味ふ種々の苦勞の道を毎日彼に説いて聞かせた。さうしていつも話の終りに、

『だからね莫様、よく考へ直して御覽。一時の熱や興奮だけではなか／＼人を救けることはむつかしいのだよ』

と結んだ。

だが彼の思ひ詰めた決心は増々堅きを加へこそすれ、一寸も弱りはしなかつた。どうでもかうでも傳道師になるといつて聞かなかつた。



かうした押し問答の揚句、私はたうとう彼の熱願を許した。莫様は子供のやうによろこんだ。

莫様は天理教校へ入學の準備に取懸つた。私は愛弟子張麗峰も一緒に入學させることにした。

神様はいつでも私の傳道の上において、片方で注ぎ込みの仕事をさせて、片方で結構な結果を見せて下さる。瀧氏一家を救ひ上げようと私はどれだけ苦勞したか知れなかつたが、瀧様は遂に救ひ得なかつた。ところが他方面から思ひ掛けなく莫様のごとき協力者を與へて貰つたのである。皮肉だといひ度い程不思議な御守護である。だがこれが理であり、道なのだ。

私は神から與へられた異國民の兩腕を、本當の道の道具に仕上げるために日本へ送つたのである。

昭和九年八月廿九日、彼等は日本に出發した張君は四年前、私に連れられて日

本へ行つたことがあるが、莫様は臍の緒切つて始めての大旅行である。疊の部屋に住めるかな、味噌汁が我慢出来るかな、ひのきしんが續くかなあと私は案じられるのである。

十月、本部の秋季大祭の團參が募集されたので、私も參加して歸國した。トラックに支那の味噌や、漬物や、菓子や栗等を一杯詰めて彼等に持つて行つてやつた。二人は非常によろこんだ。見るなり飛び附いて來た。私はいろ／＼と様子を聞いてやつた。

『日本の生活に少しは慣れたかね』

『もうすっかり慣れました』

『疊の生活はどう？』

『始めは土間に寝てゐるやうに思はれましたが、もうどうもありません』

『食事はどんなにしてゐるの』

『詰所のものを頂いてゐます。味噌汁は長い間駄目でしたが今は頂きます。時々餃子（豚饅頭）や炸醬麵を作つて食べますし、町から天麩羅を買つて来て、お菜にします。刺身やにぎり壽司のやうな生魚を使つたものは、まだ食べられませんが、お魚の焼いたのや煮たのは大分苦勞したね、張様』

二人は土産の瓜子兒（西瓜の種）を齒で割りながら愉快に話すのである。

『教校で何が一番むつかしいかね』

『禮典です』

『禮典？ どうして』

私は腑に落ちない。

『老師、禮典の時間は板の間に一時間坐らされるでせう。疊の上でも三分と坐れない私ですもの、板の上なら尙更です。禮典だけは零點でも構ひません。逃げたんですね』

『駄目だよ、我慢してやらないと。ひのきしんは毎日行つてゐるかね』

張君は私の前に兩手を擴げて、

『老師、これを見て下さい。私はむつかしい學科が判らないので、ひのきしんが楽しみです。皆と一緒に春荷つて、土を運ぶのは愉快ですね。一度も休まずに毎日行つてゐます』

『莫様。教校へ来て何か感動したことがありますか』

『ありますとも。澤山ありますよ。第一が神殿が立派で清らかなこと、そしてあれが信者の熱誠によつて出来たことです。支那の廟は埃だらけです。そして大きな廟は皆皇帝が金を出して作らされたものですから、意味が違ひます。

それから、參拜の時六千人からの下駄や靴がよく整頓され、そして誰も間違はないことです。

それから、日本婦人がよく働くことです。子供を脊中に負つて、男に負けないで

よく働きますね。

それから日本の人は上下の差別なくよく働くことです。時々管長様までが法被を着て、吾々と同じやうにひのきしんをなさいますが、中國では見られないことですね』

二人は本部に見る感激の姿を夜の更けるのも忘れて語つた。私も二人が自國にない麗しき日本を、一つ／＼はつきりと擱んでをつてくれる姿を、うれしく眺めた。二人の心が健かに伸びてくれることは私の無上の楽しみである。

私が秋季大祭に参列し、要務を終へて北京へ歸つて一ヶ月ばかり経つてからである。或る日、莫様から一通の手紙が來た。私は早速開いて見た。近況が細々と書かれてある。そして最後に、

『私と張様とは、毎日將來の中國人傳道を如何にして行くべきかと研究してゐます。これはなかく／＼むつかしい問題ですが、どうしても遣り遂げねばならん問題

です。私は先生に導かれた信者の中で、第一に教校に入學させて頂いた幸福者です。北支の道は私が開いて行かねばならんと覺悟してゐます。それについて今一つの心定めを致しました。これによつて北京の傳道は必ず一つの飛躍をしてくれるだらうと確信します。

老師、私達の歸るのを待つて下さい。歸つて老師に私の心定めを聞いて頂きませう。老師はきつとよろこんで下さるだらうと信じます』

はつきりとその實態は知らされないが、對華人傳道に大なる貢獻と飛躍とを齎す計畫に違ひない。私は彼等の歸國を鶴首して待つた。

翌年二月、學成り業終へて、彼等は北京に歸つて來た。さゝやかながら賑かな洗塵の集ひが催された。莫様も、張君も感激と希望とに燃え立つてゐた。散會の後莫様は私の居間に來て、

『老師、お疲れになつたでせう。』

今日は私、老師に教校在學中に神様とお約束申し上げて来たことをお話したいと思ひます、どうか聞いて下さい』

『あゝ待つて居たんだよ。去年貴方の手紙を見てから、どんな素晴らしい計畫かと、毎日貴方達の卒業の日を指折り數へて待つてゐたんだよ。一體どんな心定めをして来たのか話して見なさい』

『あのね老師、この傳道所も既に相當の信者が出来てゐます。私が教校へ行く前に、もうこの神殿はお祭毎に一杯でしたせう。私は本部の神殿に參拜した時、その豪壯なものと森嚴なのに本當に胸をうたれました。私は老師から本部々と何時も聞かされてゐましたが、この傳道所から推して大したものではないだらうと想像してゐましたが、豫想はすつかり裏切られてしまひました。在學中、色々と先生方のお仕込みを受けてゐる間に、私は先づ私の神様への捧げものとして、吾

の心の道場たるこの傳道所をもつと大きな、もつと立派なものにするのが私の第一になさねばならんことだと考へました。そしてそれを神様とお約束して來ました。

老師、私は明日からでも、それに掛りたいと思ひますがお許し下さいますか』  
その頃には既に信者の間でも、傳道所をもつと廣い借家に移轉しては、との議が起つてゐた折であるので、私は莫様の申出がうれしかつた。

『莫様、有難う。私に何の異存がありませんか。だがね、最近信者間にも貴方と同じ考への方が五、六人ゐるのです。着手する前に一つ皆とよく相談して下さい』  
『それは誰々ですか』

『劉印忱様、袁進南様、張捷三様、王殿卿様、郭尙文様、張彭年様等の方々ですよ』

『それでは私、明日から、その人達を御訪ねして、よく意見を聞いて來ませう。』

だが老師、出来ることなら、このことは私一人の力でさして欲しいのです』  
彼はよろこんで歸つて行つた。

日支の感情はまだく悪い。排日の烈風が時々旋風を巻いて通り過ぎる。私はこの中を神様に一條心を寄せてくれる莫様の心根が限りなくうれしかつた。

所がそれから四日目、莫様は教會へ飛んで來た。祖父が重態だからお願いしてくれとの話である。傳道所の全員は驚いた。とにかく神饌を更め、お願い勤めを勤めた。そして私は莫様と一緒に彼の家へ飛んだ。お爺様は喘息らしい。なかなか頑固で醫者も呼ばねば、薬も飲まない。儂の病氣は儂が一番よく知つてゐる、といつて頑張る。家族のものは誰も手の付けやうがない。

私は病室に入つて行つた。お爺様は蒲團に靠れて苦しうな息使ひである。私を見るなり手を合せてお禮をいつてゐる。私は側に坐つて色々慰めながら、一心に脊をさすつて上げた。それから神様のお話を一心に説いた。續いてお願いをさ

して頂いた。家族の者は吃驚した。お爺様がお授けを受けたことに驚いた。私は毎日通つた。そして一週間ほどでお爺様は起きられるやうになつた。

莫様はよろこんだ。一心に神様にお禮申上げてゐた。

二、三日して莫様が洋車を飛ばしてやつて來た。私の顔を見るなり、

『老師、良いことがありますから、一寸』  
といつて、私を居間に呼び出した。

『あのね。祖父に傳道所擴張の話をしましたところ、それは良い。しつかりやれ。儂が應援してやるといつてくれるのです。祖父が承諾してくれましたら、お金はいくらでも出してくれますよ』

時が來たのである。神様は傳道所擴張をお許し下され、勇んでかゝる吾々にお恵みを下さつてゐると私は悟つた。

莫様は毎日家探しに北京中を飛び廻つた。北京には拉房間といふ商人がゐ

る。家の貸借、家賃の取立て、家の買賣の世話をして、口錢を貰つてそれで生活してゐる。毎日何處かの茶館に落合つて連中同志の話を交換するのである。何處に空家がある。幾らで貸す。といふことは彼等の連中は皆話し合つて知つてゐる。所謂家のブローカーである。

莫様は彼等に家を探させた。そして次々に私と連れ立つて見に行つた。然しどれもこれも帯に短し褌に長しで中々思はしいのが見當らない。

北京には住宅向の家が多い。どんな大きな屋敷でも、寺院、學校、病院等の公共建築物でない限り、一棟の大きさが略一定してゐる。普通一棟が三間續きで、その上が五間、七間といふのは極く稀である。

私は信者百名が入れるくらゐの神殿が欲しい。神殿さへ立派なら人の住むところはたとへバラックでも結構である。私はこの信仰で家探しに行くので、一つとして氣に入つたのがない。

莫様と私は相談した。

『神殿として信者百名を入れるには、どうしても増築せんとないな』

『さうですよ。北京の家は皆三間か五間ですから、百人入るやうな部屋なら、どうしても建て増しせなければなりませんよ。だが建て増しして三年ぐらゐで、家主から家があるから引越してくれといはれては臺なしですね。増築の部分だけ壊して次の移轉地へ持つて行く。馬鹿臭いですね』

『さうなんだよ。移轉の度毎に壊しては建て、壊しては建てせねばならん。然も行つた先で前の増築と同じ条件の空地があれば良いが、違つてゐたら前の材料が不用になつてしまふでせう。それに費用を食はれるのは馬鹿々々しいね。永住出来るやうな家があるとよいがね』

『そんな家は北京にないでせう。そんなら一層のこと家を買つたらどうですか。建てたり壊したりする費用と、月々の家賃とを十年分一時に出す考へだつたら、

良い家が一軒買へますよ。家を買ひませう』

『家を買ふつて、そんなこと出来るかね。金の問題として……』

『大丈夫です。私が引受けて集めますよ』

『それなら結構だが、話が一寸うま過ぎる。皆とよく相談せないと駄目だよ』

『相談して出来なければ、私一人でも遣ります。きつと遣り遂げて見せます。』

『老師、安心してゐて下さい、家屋買収に變更しませう』

彼は勇んで歸つて行つた。

それから後は莫様は賣家を探して走り廻つた。西觀音寺胡同に見附かつたといつては見に行き、馬市大街にあつたといつては馳け附けた。

私は大通りに近い所、交通に便の良い所、屋敷の廣い所といふ條件で探し廻つた。

弓弦胡同、東堂子胡同、外交部街、缸瓦市、西單頭條胡同、廻茲府、等々、北

京における大きな賣家といふ賣家はほとんど見て廻つた。欲しい家も中であつたが、金が高い。

その中に私の健康が又悪化して來た。私は餘りに家の問題に熱中し過ぎてゐる自分を見出した。私は懺悔して一切を莫様に一任し、我は本來のお救いの道に進じた。

北京には秋立つ風が吹き初めて、近く夏を送るが如く盂蘭盆の灯が街々に流れる日、莫様は土地買収の話が成立しさうだといつて來た。

場所は崇文門を南に仰ぐ大街の東側、二町北へ行けば、東單牌樓の雜踏街である。前の大通りには市電が走つてゐる。理想的な景勝の地である。私は一も二もなく賛成した。

その翌日、或る古玩舖（骨董屋）の二階で、新聞紙程の大きさの高麗紙に賣買契約が、多勢の立合人の中で認められた。そして莫様から半金だけが賣主に渡さ

れ、賣主から房契（地權證書）が莫様に渡された。典三賣四といつて土地家屋は質權設定の時は、その家の店子は三ヶ月以内に引越さねばならんし、賣買契約が成立した場合は四ヶ月の移轉期間が許される。後半金は賣主が借家人の始末をつけた四ヶ月後に拂へばそれで良いのである。

私達は兩方で調印して交換された契約書と契紙を持つて歸り、神前に供へて心からお禮を申し上げた。

心の道場は莫様の熱誠によつて買収されたのである。救はれたものによつて、次の救ひの足場は作られたのである。

約三百坪の廣さであつて、絨氈屋、骨董屋、洗濯屋の三軒が住んでゐる、後は灰棚のお粗末な建物で、何處かの物置か倉庫代りに使はれてゐる。

廣さは申し分がない。現存の建物を如何に利用するかといふことに就いて、毎日協議した。

私は、洗濯屋と骨董屋とを連続するやうに建て増すことを主張したが、或る雨降の後で見に行くと、院子一面に浸水してゐるのを見て、計畫を變更した。即ち地盛をして建築にかゝることとし、一切を莫様に一任することとした。

八月二十四日地鎮祭を執行、先づ神殿建築の工を起した。

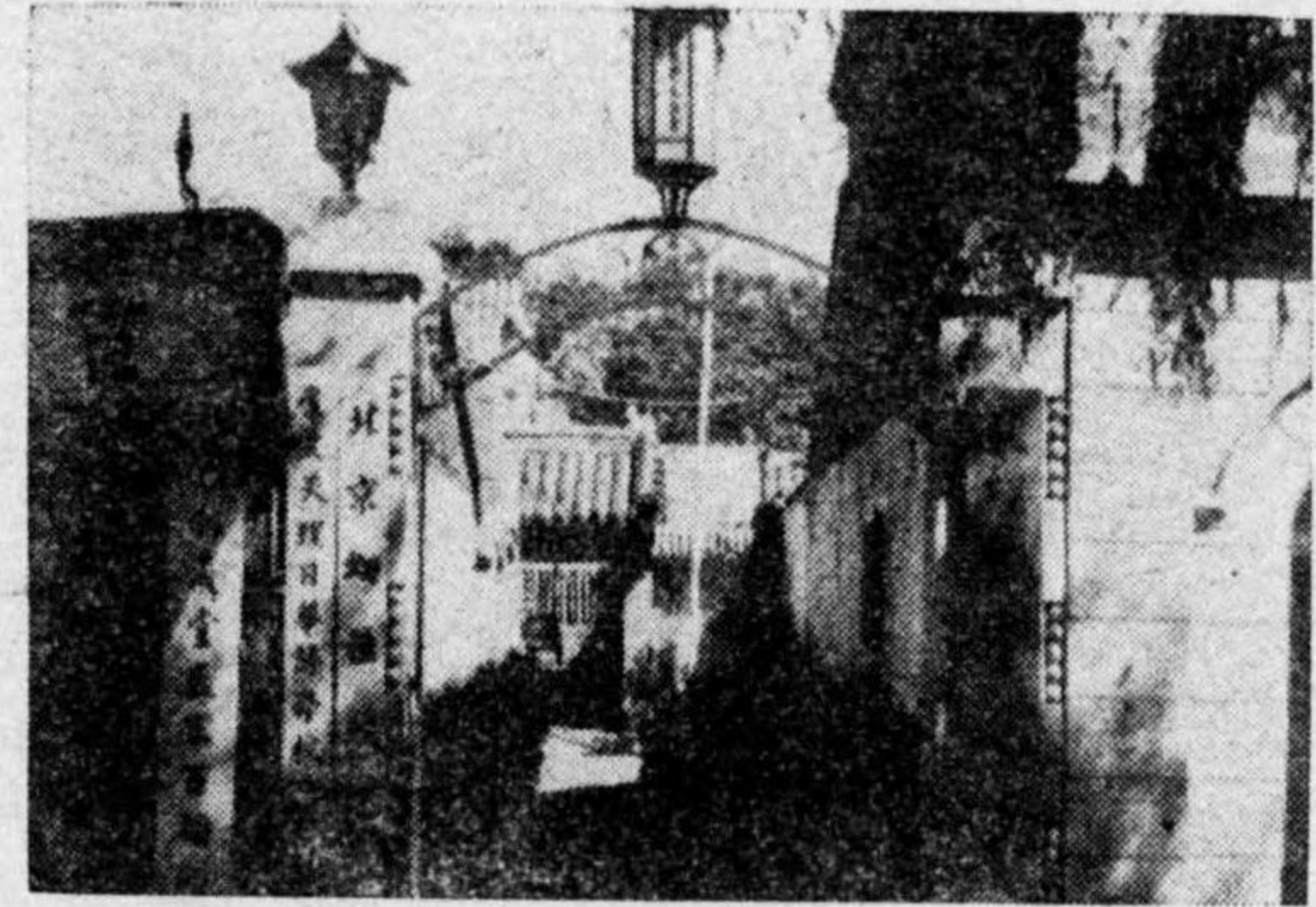
大工棟梁は英自新といひ、普通皆が英頭兒と呼んでゐた。この大工は建築の始めから終りまで一度も圖面を引いたことがなかつた。朝はきちんと八時に始め、夕方は八時に終つた。そして九時半に一憩、十一時に食事、午後は一時に始め三時と五時とに休憩した。

英頭兒は嚴格な棟梁で、仕事中は煙草は勿論、不必要な雑談を一切禁止した。

そして大工にも、左官にももう一人宛棟梁をつけた。工匠も苦力も一生懸命に働いた。凍結の冬を間近にひかへてゐるので、毎日五、六十名の人間が働いた。

私は支那での建築は始めてゐる。否家を建てるといふことは生れて始めてゐる。





門正會教文崇

ある。工事監督をしてゐても、どんな所を注意して行かねばならないか全然分らない。やはり一切は莫様にまかせて、相談相手の程度である。

煉瓦建で洋式と支那式とを加味した。屋根は乾隆、雍正年製の宮殿に使はれてゐた緑色の琉璃瓦で葺き、下は漢白玉の眞白の欄杆を使つて外廊を造つた。

神殿がほゞ出来上る頃、莫様は私に、

『老師、神殿が大體落成しましたが、次に事務室の建築ですが、便利の點からいつても、神殿の隣がよいでせう。老師は灰棚を利用せよと仰有いますが、灰棚をそのまゝでは全體の調和が到底とれません。壊して神殿と續いたものを作りませう』

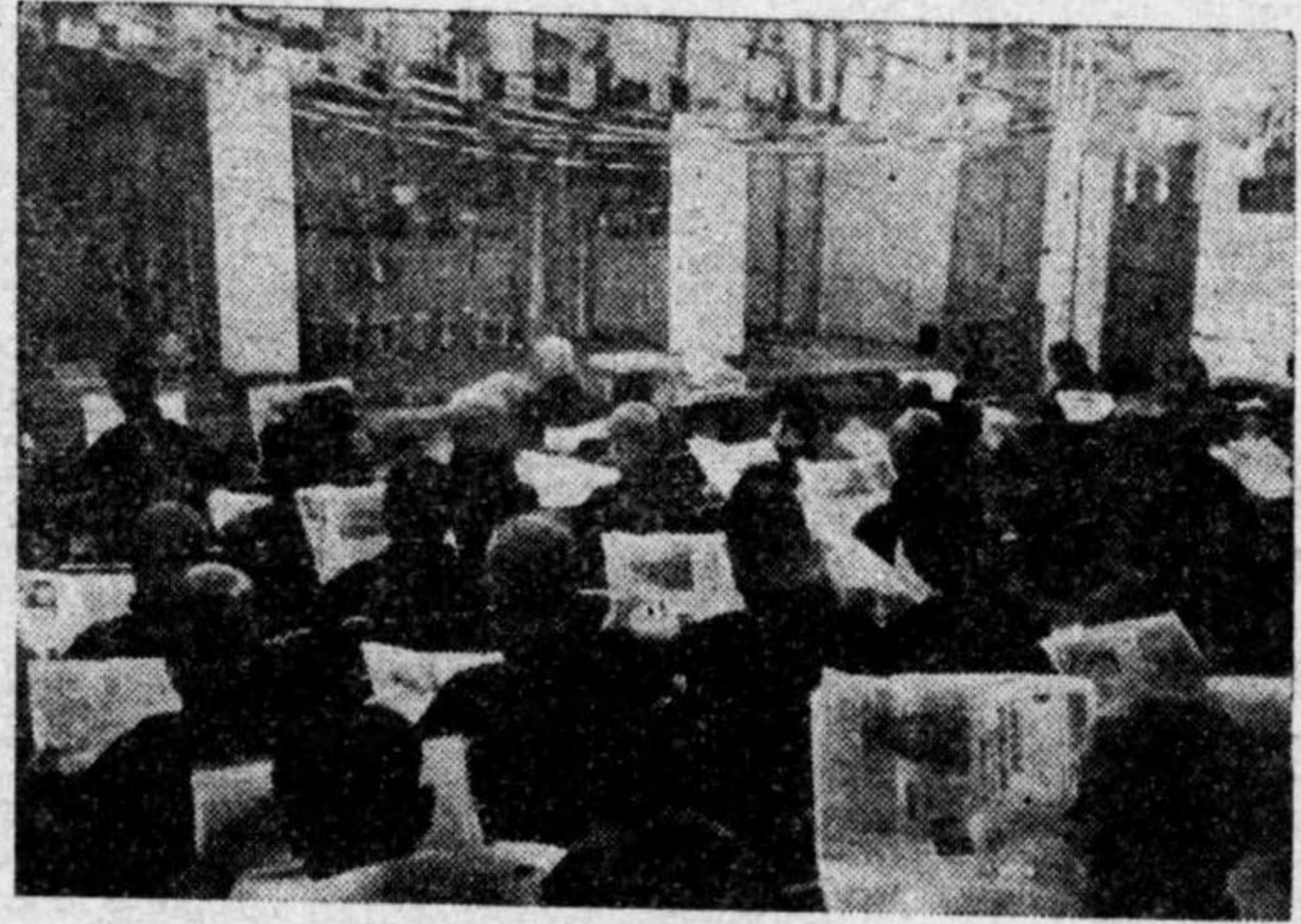
『う』

『だが一萬圓の豫算で、足りるんかね』

『實はそれでこの二、三日奔走してゐるのです。不思議な御守護を頂きさうですよ』

『大丈夫なのかね』

『大丈夫ですよ、近頃、不思議に私に思はん金が集まるのです。祖父がずつと以前に借した金で今日まで幾ら足を運んでも還してくれなくて、私の家では諦めてゐたものが、この建築にかゝつて以來、次々に拂つてくれ、それだけでも相當な金額に達してゐます。私は神様の御恵みといふものは實に有難いものだ、つくづく思ふのです。人間ではどうしようもないことが、實際に現れてくるのですからね、たとへ豫算超過になつても、私は神様の御力によつて、何とか都合が附くと私には固く信ぜられるのですよ』



崇文教會神殿

『さうかね。それは良い體驗を得たね。それは神様が非常によろこび勇んで下さつてゐる證據だ。だが無理をしてはいかんよ』

莫様は灰棚を壊して、事務室を建てた。つづいて又灰棚をつぶして應接室を建築した。次々に教室、住宅、炊事場、浴室、納屋等十一棟の家を建てた。屋敷内は全く見違へるやうに面目を一新した。

私達夫婦は十月に信徒一同の委囑を受けて、教會設置の願書をたづさへて、本部に歸つた。莫夫人も授訓拜戴に子供をつれて吾々と行を共にして、十一月三日 明治節の菊薫る佳辰に、その名も崇文教會と、本部から設置の許可を得た。

さうしてその年の十二月、押し詰つた三十日の夜に、二百數十名の信者に守られ、鈴鐺胡同の屋敷から木の香芳しき新神殿へ、神靈遷座の式典を執行し、まだ生乾きの家の中へ無事移轉を完了した。

樓上、樓下、總建坪二〇一坪、四十五間、工費二萬元の心の道場が、排日の烈風吹き募る中に、崇文門内大街の一角に、莫震盈君の誠眞實によつて屹然と聳え立つたのである。

と同時に神殿内の椅子、机を始め事務室、應接間等教會内部の諸設備も、救はれし中國の人々の熱誠を集めて整備されたのである。

或る人はこれを奇蹟だといつた。  
或る人はこれを神の神秘だと評した。

然し私はこれを誠の昇華だと信じたい。  
教會は心の道場である。誠の賣店である。然もそれはあくまでも傳道の足場で

あり、手段しゅだんであつて傳道の目的であつてはならぬ。

私は一同に常にかういつてゐた。

『中國傳道の足場が確立かくりつした。神様は何か大きな仕事を計畫してゐられる。今に見ろ。御用が忙しくなるぞ』

と。

その後七ヶ月。北京西郊蘆溝橋より、世紀轉換せいきてんくわんの支那事變が勃發ぼつぱつした。中國は新しき使命に蘇生そせいし、民衆は新しき建設けんせつに發足した。

私は神殿の玄關に立ち、灼やけ附く大空を仰あふいで獨語どくごした

『教會落成はやはり今日の日に對する神様の一つの準備じゅんび工作であつたのか』  
と。

明  
朗  
通  
州

明朗通州。

私の愛弟子の一人に張彭年といふ青年がある。

早くから入信して、天理教校別科も五十期に卒業し、既に教師の資格を得て、中国人教化に熱のある傳道を行つてゐる。

彼の故郷は、通州から約二十支里南の梁子といふ村にある。父は土地の豪農で附近二十三ヶ村に亙つて二百數十町歩の田地を所有してゐるのである。

支那事變が勃發し、同じ月の二十八日、通州に聞くも慘らしい邦人の虐殺事件が起り、二百四十二柱の忠魂が事變の犠牲となつて散つた。

常から日支親善の熱に燃えてゐる彼には、この一事件は大なる衝撃を與へた。或る日、彼は私に、

『老師、私を通州に歸らして下さい。私は通州に歸りたいのです。私の仕事は通州にあります。北京のこの教會で救け一條の御用を勤めてゐるのも結構ですが、

それでは私の信念が許しません。どうか通州へ歸ることを許して下さい』

眞剣な、思ひつめた口調でかういふが、私にはもう一つその意味が分らない。

『どうして急に通州へ歸りたくなつたの？ 通州へ歸つて百姓でもする積りかと訊ねざるを得ない。』

『いゝえ、百姓などはしません。出来るか出来ないかわかりませんが、通州で傳道したいのです。そして通州の人間の心を洗ひ替へたいのです』

かう聞くと、大體彼の心の輪廓が察しられて來て、謎のやうな言葉の意味が解けて來た。彼は續けて、

『老師は通州事件をよく御存知でせう。どうして起り、どういふ結果になつたかを、老師はあれをどんなにお考へですか。』

私は中國人として、あれは保安隊のやつたことだ、自分となんの関係もないのだと普通の人間の考へてゐるやうに、袖手傍觀してはをられません。教祖によつて

教へられ、老師によつて導かれ、萬人の師表となるべき天理教々師の肩書を、神様から頂戴してゐる以上、考へれば考へるほどジツとしてはをられないのです。通州傳道は私の懺悔です。通州全縣の者のお詫びと、懺悔の前に、私は懺悔の行を實行したいと思ひます。

老師、私の氣持が分つて下さつたでせう。どうか私を通州へ傳道にやらして下さい』

紅潮した顔で彼は切々と頼むのである。

私として元より異存のあらう道理がない。まだ日本宗教の傳道には、誰も通州に脚を踏み入れてゐない。これこそ私の天與の仕事だ。ことに暴虐鬼畜のごときあの保安隊と、國籍を同じくする中國人によつての淨化こそ、眞の淨化であり、無慘にも兇刃に斃れし幾多の英靈も、これによつてこそ眞に慰められるだらうと考へた。

さうして早速準備を整へ、各方面との連絡を遂げて彼を通州に派遣した。かくて事件發生の翌年二月、通州城内の一角に張彭年によつて設立されたのが天理教通州傳道所である。

彼は孜孜として懺悔の行にいそしんだ。觸るれば焼け切らん熱で彼の信仰を民衆にぶち撒けた。彼の熱によつて集ひ來るものは日一日と多くなつて來て、一年後には百名以上の入信者が出來、彼等はほとんど通州全縣に分布するやうになつた。

戰爭の後には敗殘兵は附物である、敗殘兵は長期に亙ると土匪といふ芳名を頂く。土匪も中國人にはせると一種の商賣であるさうだ。一六勝負で、喰ふか喰はれるかの荒仕事、うまく行けば荒稼ぎが出来る。

戦後の治安の確立してゐない隙に乗じて、軍官憲の手のおよばないところを見

附けて蠢動する。彼等は晝間はそしらぬ顔で鋤を擔いで畑を耕したり、荷物を荷つて商賣をしてゐるが、日が暮れると本式の仕事にかゝるのである。これが彼等の常套手段である。だから最初は誰が土匪をやつてゐるのか一向に分らない。農民達はたゞ、物騒になつた、夜は氣を附けんといかんとわい／＼騒いでゐるだけである。

彼等も初めの中は野道の真中に通行人を待ち伏せて、所持金を強奪する程度であるが、だん／＼と度膽が出来て來ると、三人五人と徒黨を組んで家を荒す。

ところがさうなると顔を知られたり、村人に嗅ぎ出されたりして身の危険を感じ出す。すると村長を脅したり、時には密告しさうな正義派の人間を犠牲の槍玉に擧げて、衆口を緘封する手段に出る。よし誰か密告しても逃げる道を考へながら仕事をやる。

いよく治安が確立して來ると、彼等の身邊に危険が増大するので、嫌でも集

團を作つて、衆力をたのんで仕事をやる。仕事も大が／＼になり、脅迫状を送り込んで、金を持つて來さしめるか、綁票によつて生命と引換に金をせしめるかの二つの方法をとる。

綁票とは人質のことである。

農民達もかうなると怖ろしくて、田舎でゆつくり畠を作つてをられない。金のある比較的裕福な者は安全地帯を目指して家族をつれて逃げて行く。結局、取られるものも何もない水呑百姓だけが村に残つて耕作してゐるといふみじめな農村の状態となる。

通州縣下にもかうしたところが出来て來た。隣の縣との縣界附近は常に彼等の通路となつて、往道の駄賃にとよく掠められたり、荒されたりした。

全縣下に信徒が増加するにつれ、參拜に來る信徒達に齎される各方面からの消息によつて、縣下のその日／＼の様子が手に取るやうに判明する。

張所長は勿論、傳道所全體もこれには惱まされた。武器を持つ彼等には如何とも手の付けようがなかつた。たゞ頼むは皇軍の威力のみである。前々から傳道所に援助に行つてゐた山本道男君が、その役を引受けて、各方面との連絡に奔命した。結果は良好であつた。多くの民衆が救はれた。

が土匪側には傳道所の活動が大きな邪魔物であつた。遂に本教の信者の上に彼等の兇暴なる魔手が伸び、犠牲者を出すに至つた。

吾々は哀れな犠牲者のために泣いた。しかし泣きながらもこの仕事を繼續した。

信徒に發行した信徒證も取上げた。傳道所の徽章も帶用を禁止し、一切天理教の信者たる色彩を消さして活動を續けた。

信徒達も傳道所に參拜に来るにも、決してお參りに行くといつて来なくなつた。通州の城内へ買物に行くとか、縣廳へ税金を納めに行くといつて、村からお

參りに來た。

昭和十四年三月、大地の氷も漸く溶け始め、村々の麥の芽がやうやく起き上つて來た頃である。

或る日、張所長の田舎から、管理人の龔様が驢馬に鞭を當てて、蒼白な顔をして呼吸せき切つて通州の傳道所に馳けつけた。

彼は神様を拜むのも、もどかしさうに所長室に飛込んで、不審に思つてゐる所長に一通の手紙を手渡した。手紙には

張殿元殿

本軍目下糧食並に給與に困窮致居候間暫時二萬元拜借仕度此段申入候也

救國軍第十一支隊長

鈕永鎮

と書いてある。

張殿元は張所長の父の名である。そして鈕永鎮とは通縣の邊疆を荒し廻つてゐる音に聞えた土匪の頭目である。部下だけでも二百餘名を擁してゐる匪梟である。

流石豪膽な張所長の顔色も變つた。龔管理人の話では、何でも今朝早く傭人が表門を開けに行くと、この手紙が門内に抛り込んであつた。裏側に差出人の名前がないので、不審に思つて開封して見ると、鈕六からのこの手紙であつたので、膽をつぶしてしまひ、顔も洗はずに驢馬を引出して、こゝまで馳け附けたのであるとの話である。

鈕六とは全縣に誰知らぬものとなつた鈕永鎮の呼名である。

張所長は早速北京へ飛んだ。北京にも彼の家がある。事變勃發の七、八年前から彼等一家は北京に移住してゐるのである。

彼は父にその手紙を見せて前後策を鳩議すると共に、私の下に飛んで來た。

彼は私に説明して曰く。

『この手紙は表面は借金の申込みですが、これが彼等の常奪手段です。彼等の脅迫状です。借りた金を還したことの無いのと、貸さねば必ず報復手段に出るのが何時もの遣口ですからね』

彼も思案に餘つてゐる。張一家にしてみれば二萬元は大した金高ではない。素直にこれを土匪に寄附して一家の生命の安全を計らうか、それとも今までの彼等との鬭争をあくまで繼續しようか。然し今後はこちらの命懸けである。何時彼等一味の兇弾の鏑と化せねばならないか知れない。兩親あり、兄弟あり、妻あり、子ある彼としては決斷に苦しむのも無理はない。

私は私の信念から、この危機は張一家の信念による以外には、脱れる道はないと判斷した。如何なる苦境の中に立たされても、正義の前には敵はない。必ず神助があると確信してゐる。



『張君、心配するな。君の傳道所設立以來の苦闘は、神様が承知してをられる筈だ。君の家には理が積めてある。神意に添つて突進しろ。土匪に今更卵が脱げるか。二萬元はおろか鏹一文も彼等に與へる金は君の家にはないよ。通縣の民衆のために捧げる金はあつても、通縣の民衆を苦しめるために使はれる金は一文も無い筈だ。』

天理を通せ、決して天理に反することはするな。神に祈つて、あくまで彼等と戦へ！』

と私は彼を激勵した。彼も決心した。二人は神前で初志貫徹を誓つた。

私は考へるのである。若し吾等が命惜しさに、出せる金高なるがゆゑに彼等の要求を聞いて二萬元を彼等にやるとする。第一回はそれで済むだらう。しかし必ず遠からぬ中に第二回目の要求、第三回目の申入が必ず来る。そして何時かはこちらも拒絶せなければならぬ日がある。その時は今と同じ苦境に立たされる。

同じことだ。第一回から撥ね付けて置くべきだと。

張一家は決心通り、その脅迫状を焼き棄て、不問に附した。

私はその間、各方面と連絡に飛び、萬一に備へた。

ところが二、三日後、再び鈕六からの書状が届けられた。

張殿元殿

前日書面を以て申入候借款の件、未だ御回答に接せず候も如何相成居候や。

今日より三日以内に銀貳萬元、〇〇停車場西方第三號橋梁上まで必ず御届相成度、再度申入候。

若し御承知無之場合、或は其の筋に密告等相成場合は、全家焼却は勿論、一家鑿殺御覺悟相成度、爲念申置候。

救國軍第十一支隊長 鈕 永 鎮

日附を見ると三月五日と書いてある。約束の期限は七日中である。後二日しか

ない。

彼は通州に飛んで歸つた。

命もいらん、家もいらん。鈕六を斃すまでは如何な悲惨に見舞はれやうが、如何な窮地に陥し入れられやうが敢闘する。八萬の縣民のため、將又、東亞新秩序建設のため、我が身は火に焼かれやうが、八つ裂きにされやうが、あくまで決闘しようと思ふ決心を固めた。

彼は先づ信徒を總動員して情報を集めた。

そして鈕六や彼の部下の足取りをさぐつた。

一方、守備隊や警察隊と連絡を取つた。

管理人の龔様と二、三の重立つた者を除いて、田舎の家に居る小作人全部を適當に避難させた。

そして田舎の家に貯蔵してある麥、粟、玉蜀黍、豆類等の農産物を始め、家畜

農具、家具全部を通州城内に運び、何時彼等の報復の放火に家が灰燼に歸してもかまはない計畫を立てた。

期限の三月七日の日が到來したが、終に金は持つて行かなかつた。

その日通州の支那側警察隊から應援隊を出すから早く田舎の家を片付けよと、好意的な協力を申し込まれた。

翌朝午前三時、警察隊を満載した九輛のトラックは、夜闇を衝いて通州の南門を出發、武清縣への街道を轟進して行つた。續いて田舎の家にある貯蔵物を運ぶべき十四輛の荷馬車が、その後を追つて梁子村目がけて繰出して行つた。

風もなく星もない大陸の平原を、荷馬車は鞭音も忍ばせて凍り付いた道を急いだ。車柄に釣つたカンテラが不気味な影を馬脚に揺つてゐるのみである。誰一人咳一つする者もない。

鼻の鳴く森影を通り、霜に白んだ土橋を渡り、六時頃やつと梁子村の彼の家に

着いた。

大門を開いて十四臺の車を中庭に引き入れ全員必死で穀類、農具類を車に積み上げた。

警察隊は既に配備に附いてゐるらしい。大門外には只五、六名の武装姿しか見えなない。

物凄く冷える夜である。鬼氣身に迫るがごとく外套を通して寒氣が身に沁む。

白々と夜が明け初めた。が見ると一面乳色の世界である。深い霧が天地を包み五尺先のものさへ定かでない。

彼は主屋の入口の下馬石の上に立つて、一同を指揮した。一陣々々霧が流れて家の軒を傳ふ。

いよくこの家ともお別れた。父親が吾々子供のために自ら指圖して建てられた懐しい家、長い間自分を守つてくれたこの家、いよく今日で見治めになる

かも知れん。

幼い頃の數々の印象を頭の中に呼び起しながら、霧にうすれた家を眺めてゐた。すつかり荷物が積み上げられ、太い繩を締め終つたのは十時過ぎであつた。

彼はホツと一息ついて、無事に積込の完了したのを神に感謝した。

そして彼はもう一度各部屋を見て廻つた。二十幾棟のどの部屋にも彼を育んだ乳の香が漂うてゐる。

後にはボロ机と腰掛や板片、等が残つてゐるだけである。これでよしと庭に引返して來た。

そして彼は手代にいひつけて屋根へ梯子を懸けさせた。そして自分自身で攀ち登り、飾瓦を一枚外して持つて下りて來た。

彼は時を移さず全車に出發を命じた。一番最後に彼は管事の龔様と出て行つた。大門の鍵は彼が下した。そして心に祈つた。

『神様、もしこの家がこのまゝで通縣六萬の人々の救いの役に立つものでしたら、どうか焼けないやうに御護り下さい』

祈り終ると踵を返して車を追つた。

霧はなほ深い。太陽が空に眞白い。前の車が半ば霧の中に消えて見えない。人の聲と轍の音のみが霧と共に流れて来る。

彼は先頭に立つて車を急がせた。馬に鞭を加へさせた。そして能ふ限りの全力で歸路を急いだ。

やがて霧が霽れて行つて冬枯の村々が遠方近方に見え出したかと思ふと、間もなく物凄い風が吹いて來た。蒙古風である。黄塵を捲いて朦々と吹き寄せて來る。木々は啼々と鳴つて梢を地に伏せんばかりに荒れてゐる。太陽は再び白く黄塵に煙つて行つた。馬も人も首を垂れて頭で風を突いて行く。

二つ三つ村を通り過ぎた時、後で急に銃聲が二發響いた。續いて又一發。又一

發。續いて五、六發。

彼は先頭の車から飛び下り、黄塵の中で怒號した。

『急げ。急げ！ 馬に鞭を加へろ！』

と最後の車から傳令が飛んで來た。

『土匪です。三人です。追つて來ます』

いふ間もなく又銃聲が二發、三發。

彼は十四輛の車の傍を怒鳴りながら馳け廻つた。

『土匪だ！ 馬を急がせ！ 走れ！ 走れ！』

彼は最後の車の上に飛び乗つて荷の上に腹匍ひになつた。心の中ではもう觀念した。荷物を満載した車だ。どんなに急がせても限度がある。仕方がない、運命だ。

とその時、左の森の中から物凄い銃聲が起り出した。同時に先頭の車から、

『警察隊が来た!』

と傳はつて来た。首を上げて振返るが塵黄の嵐で見通しが利かない。が間もなく一臺のトラックが警察隊を満載して車の横を通り過ぎた。

彼はやれ／＼と安心した。熱いものがグツと胸底にこみ上げた。

後方で激しい銃聲が起り出した。濛々たる嵐の中で、豆を煎るやうに響いてを

つた。後方を警察隊に託して彼は車を急がせた。そして正午過ぎやつと通州城内にたどり着いた。

彼は九死に一生をお與へ下さつたことを神前に御禮申上げ、一同の努力を勞つた。

信徒達も朝から神前に詰め寄つて、所長の安否を案じてゐたが、無事安着の埃まみれの顔を見たので、やつと安堵の胸を撫で下ろした。

午後二時過ぎ、警察隊が今無事歸着したと電話が掛つて来た。しかも土匪二名と土匪の頭一個、外に人質に取られてゐた者八名を救ひ出して来た。當方には一人の負傷者もなし。との快報である。

ところへ警察隊の馮小隊長が飛んで来た。彼は傳道所の信徒である。

『張所長様。御目出度う。無事に家を片附けられて結構でしたね。今朝の霧、そしてあの黄塵、全く神様の御守護でしたね。ところでもう一つ、あの土匪の首ね、あれは服装から持物から推定して確に鈕六ですよ。奴様、貴方方に脅迫状をつき附けたが返事のへの字もない。約束の昨日は〇〇〇橋の下で一日唐つ風に吹かれて待ち呆けを喰はされたので今日は腹を立て、貴方が家を片附けに田舎へ歸つた情報を聞いて飛び出して来たのでせう。あの風で見通しが利かないのでこちらの網にかゝつたのが運の盡きでせう。眉間に一發と腹に一發受けて斃れてゐましたよ。いづれ誰かに首實検査すでせうが、鈕六だつたら貴方大手柄ですね。これも

全く神様ですわ……』

二人は抱き合つてよろこんだ。若しそれが鉦六だつたら、若しそれが鉦六だつたら、私の命懸けの念願を神様が聞いて下さつたのだ、と。

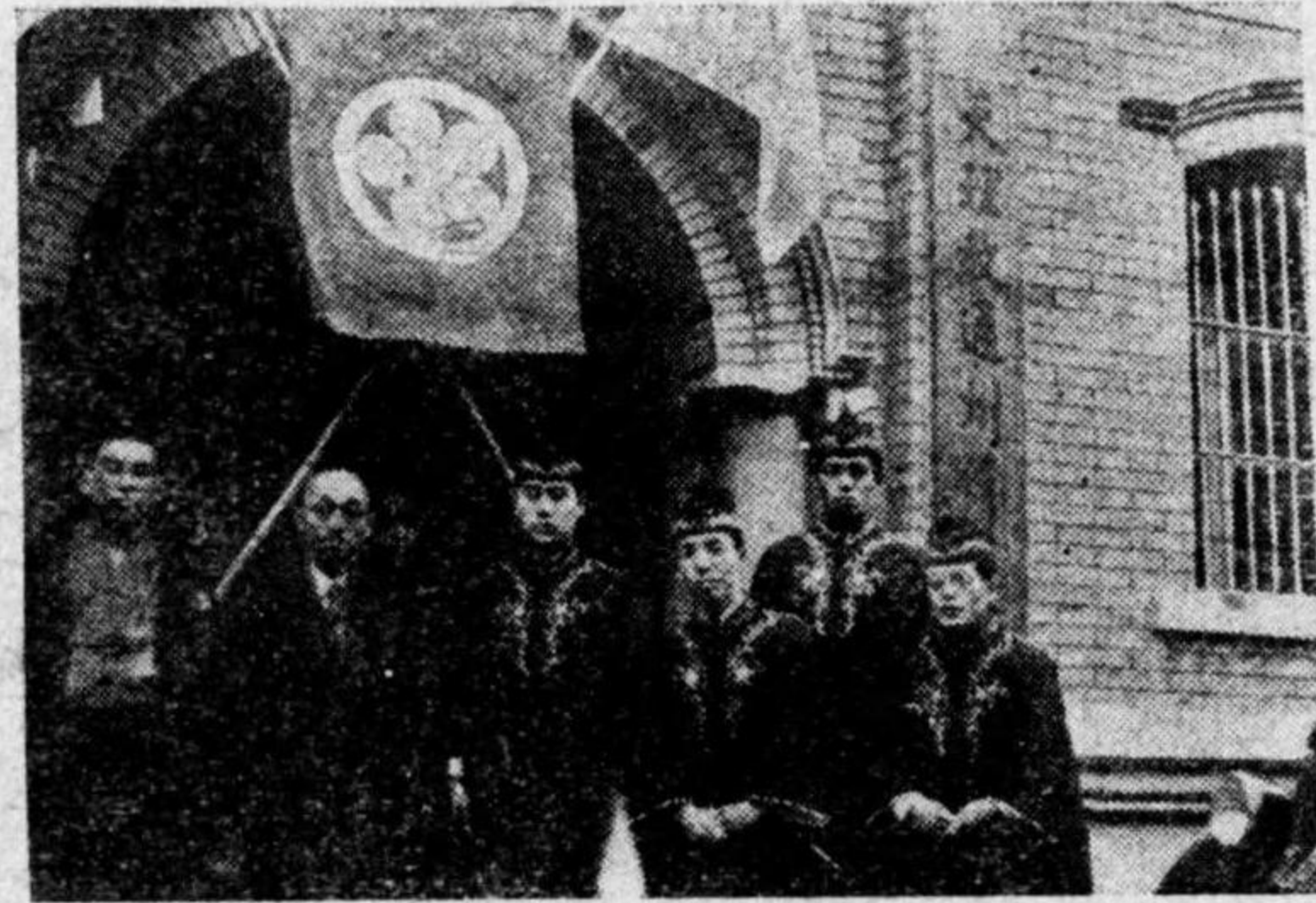
やがて城内に居る古老の二、三名が警察隊に呼ばれて首實檢が行はれた。誰の口からも同じく鉦永鎮に違ひないと證言された。

六萬の通縣民は助かつたのである。張所長の勇敢なる行動によつて通縣民は救はれた。

縣知事は張所長を縣廳に呼び、彼の手を堅く握つて彼の機宜に適した行爲を賞讃した。

日本守備隊の〇〇隊長も自動車を傳道所に乗り附けて、本隊を代表して君の沈勇に感謝すると御禮を述べられた。

張所長の懺悔の行ひは又一つ通州を明朗化した。



通 州 傳 道 所

通州城は北から東に一本の川によつて抱かれてゐる。運糧河といつて、北京の朝陽門外に發し、通州の横を流れて天津に至り、更に南下して揚子江に達する大

運河の一部である。昔は中南支の各州から、北京の皇城に納まる年貢米や造營に使用される珍木稀石が、この川を船で北京に運ばれたものである。

その年は北支は雨の多い年であつた。至るところ物凄い雨で、橋が流れた、家が倒れたといふ消息が新聞に頻々と報せられた。

七月廿五日から降り出した北京近縣の豪雨は三日降つても、なほ止みさうになかつた。

そして二十七日の夜半頃から、遂に運糧河の堤を越して、凄じい勢ひで通州に暴れ込んだ。

居室で山本君等と語つてゐた張彭年は、窓を打ち屋根を鳴らして降り注ぐ雨の騒音の途切れくりに、表の方が何だか騒々しいので變に思つて、門口へ飛び出してみた。

雷雨の中を濡れ鼠になつた三人の男女が蒲團や鍋を脊負ひ、子供の手を引いて通るのが閃光に照し出されて見えた。胸を打つものを感じた所長は、

『もしく、どうしたんですか』  
と尋ねて見た。

『北門外に水がつき出して、今逃げて來たのです。もう膝までついて來ました。今夜は危いですよ』

かういひながら、彼等は雨の中へ忽々と消えて行つた。彼は門口に立つたまゝ

白い矢のやうに水溜りに降り注ぐ雨脚を眺めながら、大事にならねばよいがと心配した。

彼は部屋に歸り、青年を呼び、

『お前濟まんが、北門まで行つて、一寸様子を見て來てくれんか』  
と一人を偵察に出した。

青年は自轉車を飛ばして見に行つた。と急に縣公署の半鐘が鳴り出した。

彼は法被を着、その上から雨衣を被つて待つた。青年は歸つて來た。

『所長様、北門外は大變です、腰の邊まで浸水してゐます。城外の人間は必死で城内へ逃げてゐます、これは大事になりますよ』

言ひ終らない内に、すぐ近くの鼓樓の半鐘が陰雨の夜に殷々と鳴り出した。

所長は所内の全員を起して、懷中電燈を用意させた。そしてそれぐに命令した。或る者は役員を召集しに走つた。或る者は太繩を集めに飛んだ。

『北門から城内に浸水し出した』

と誰かゞ傳へた。

『北門がしまつた』

誰かゞ消息をもたらしした。

『東門からも水が入り出した』

彼はもうジツとして居られず、雨帽を被つて東門へと馳け附けた。水は波立ちながらも街上に流れてゐる。進むにつれて深まつて行く。東門は既に固く鎖され、土嚢で水口を押へられてゐるが、濁水はその上を越して瀧のやうに内へ流れ込んで來てゐる。暗いカンテラが門洞の中に陰慘に揺れてゐる。

これは大變だ、城外は駄目だと思つた。

城の外には五百數十軒の人家が、河岸まで櫛比してゐる。彼等の救はれる道は城門をくゞつて城内に逃げるより道がない、だが城門は北も東も、城内への浸水

を防ぐために鎖されてゐる。残された道は？ 三丈の城壁の決死的登攀である。

所長は城壁に馳け登つた。下は人の世とも思はれない阿鼻叫喚の生地獄である。救ひを求むる必死の叫號が、雷鳴に交錯して遠く近くから心臓に突き立つ。誰かゞ上から繩でズブ濡れの子供を引上げてゐる。總ては分つた。

所長は馳け下りて、傳道所へ飛んで歸つた。

役員達は集まつてゐた。彼は全員を二隊に分けて、一隊は東の城壁へ馳けさせた。他の一隊は彼が率ゐて北門に走つた。青年には舟の調達に行かせた。太繩が幾條も彼等の手に握られてゐた。

北門上には縣公署の救助隊や皇軍が出動してゐるが、到底手が足りない。

彼等を綱をつなぎ合せて、城壁の上から下へ垂らした。そして城根にひしめき合ひながら逃げようとする水の中の人々を城頭へ救ひ上げた。必死である。雷雨にたゞかれながら必死に引き上げた。



裂帛の救ひを求め、聲が豪雨の撥音に混つて、耳朶に痛い。人々が屋根の上を右往左往してゐるのが、閃電に白く浮く。水は既に軒をひたしてゐる。戸に乗つて水に流れて行くものもある。屋上に手を振つて救ひを求めてゐるものもある。救ひの舟がカンテラの灯をゆりながら二、三隻街の中を漕いでゐるが、中々助けを求め、聲には届かない。

所長等は次々に老若男女を城壁の上に救ひ上げて行つた。

救はれた者共は新民教育館や縣公署に收容されて行つた。

彼等は必死になつて綱を引いてゐた。

その時、脚下に異様な震動を受けてはつとした。懷中電燈で照して見ると大きな龜裂が黒い口を大きく開けてゐる。

『危い！』

彼は城内の方に近く立つてゐた二、三人を、力まかせ引つ張つた。

その瞬間、ドーと物凄い咆哮を上げて城壁の一部が城内へ雪崩れた。ギヤツ！誰かゞそれに足をすくはれて泥砂と共に轉落したらしい。ドヤ／＼と人の馳ける音がする。誰か判らない。闇と雨が一切を包んでゐる。

傳道所の青年の舟を漕ぐ姿が目についた時は、雨の夜がそろ／＼明け初め、薄明の曙光はそこに展開してゐる悲惨な状景をすつかり曝け出した。

水は北から押し寄せてくる。城壁に遮られた水は城根に噛み付きながら、東に廻り、城壁を洗ひ、街に渦を巻きながら南へ流れて行く。

激しい流れに次々と家が倒れる、泥の山が崩れる様に倒れて水中に没する。アツといふ間に屋根の人が濁流に投げ込まれる。浮きつ沈みつ救ひを叫んでゐる。

城頭から救ひ舟を叱咤するが間に合はない。皆はハラ／＼してゐるが、施す術がない。流れて行く人は街角の渦に巻かれて見えなくなつて行つた。

また家が崩れる。人々が濁流に流されて行く。

丁度その時、誰か城頭から濁流へ身を躍らせたものがある。皇軍の勇士である。戦闘帽が水から浮び上つた。そして濁流に揉まれながらも流れ行く人の側に泳ぎつき、繩をその身體にかけた。一人の女は髪をつかんで引寄せた。もう二人とも氣を失つてゐる。戦闘帽は泳ぎながら城根にたどり附いた。見ると彼の腰の帯皮には女の髪の毛が巻きつけてあり、繩が結び附けてあつた。假死の二人を繩で城壁の上へ釣り上げた。勇士は暫く城根で憩つてゐたが、また次の流れる人を見附けて、水中に潜つた。そして繩で縛つて助け舟にたどり附いた。城頭の所長等は片唾を呑んで彼の勇敢な活動に見とれてゐる。次々にかうして彼の勇士に救はれた者は少くなかつた。

やうやく雨は止んで來た。城頭から幾十條の太綱が垂らされて、次々に人々を救ひ上げて行く。助け舟も必死である。次々と屋根の人々を助けては城根に運んで來る。追ひ、舟の數も増して來た。救助が行き渡るやうになつて來た。

縣公署も警察も軍隊も總出である。それで彼は一先づ傳道所に引き返し、あの多くの難民の處置につき所内の主な者と相談したところ、忽ち傳道所を難民收容所として提供することが一決したので、彼は信者達に命じて神殿其の他各室を片付けさせ、饅頭を千個注文し、同時に北京の教會へ慘狀の報告に人を派した。

一方收容所としての手筈が大體ととのつたので、早速縣公署へ傳道所を收容所に提供する旨申し出でさせた。やがてその使が歸つて來た。

『難民收容所に提供して下さるについて縣公署は大變感謝しました。で早速教會は婦女子を預つて下さいといふ話です。そして所長様は水災救濟委員になつて頂きたいといふことです。委員會がすぐ縣公署で開かれますから、その足で行つて下さい』

彼は救助を信者に委して縣公署へ馳け附けた。會議はすぐ始まつた。收容方法、食糧問題、被服問題、費用等は決定して彼は傳道所へ歸つて來た。

早速、彼は各係を決定して、來合せた人達を信者の召集に走らせた。縣公署からアンペラが運ばれた。各室にそれを敷かせた。待つ間もなく、家を失ひ、家財を失つた。婦女子が教育館や縣公署から續々と到着した。皆頭からの濡れ鼠である。彼等はお互に恐ろしかつたこと、悲しかつたこと、將來のこと等を喋りながらアンペラの上に腰を下した。

やがて饅頭が届けられた。彼はこれを救助隊に届けさせ、舟でまだ屋根に避難してゐる人々にも分けさせた。

午後に入ると洪水は減水し出した。救助隊も引上げて歸つて來た。所長は彼等信者を督勵して收容難民の世話に當らせた。

當時の鈴木傳道廳長様の厚い御同情の慰問金に添へて、北京の教會からも八百六十點からの衣類と、二百餘圓の義捐金が届いた。

中にはお産する人もあり、病氣に罹るものもあつた。彼等を温かい心で抱きし

めて、晝夜を分かつた世話をした。

百五十五名の婦女子は、約半月間、傳道所で厄介になつた。彼等は泣いてよろこんだ。

水害によつて張彭年はまた一つ通州に明るいものを齎した。

彼の懺悔の行とした。

慘虐の街、通州の城門に、こんな標語が掲げてある。

『明朗通州』

所長張彭年は毎日その下をくゞつて、同胞救済のため今もなほ奔走してゐる。

蘆

溝

橋